国立国語研究所学術情報リポジトリ

# 基礎篇第六課　しずかな　こうえんで：形容動詞



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2020-03-25<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 国立国語研究所<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.15084/00002785 |

日本語教育映画解説 6

# 基礎篇 第六課 しずかな こうえんで

## ——形容動詞——

国 立 国 語 研 究 所

# 前　書　き

国立国語研究所では，昭和49年度以来，日本語教育部ついで日本語教育センターにおいて，日本語教育教材開発事業の一環として日本語教育映画基礎篇を作成してきた。これは従来，文化庁において進められていた映画教材作成の事業を新たな形で引き継いだものである。

日本語教育映画基礎篇は，各課5分の映画にそれぞれ完結した主題と内容を持たせ，それを教育の必要に応じて使用する補助教材，また，系列的に初級段階の学習事項を順次指導する教材として提供しようとするものである。

映画の作成にあたっては，原案の作成・検討から概要書の執筆まで，また，実際の制作指導においても，日本語教育映画等企画協議会委員の方々に御協力頂いた。ここに厚く御礼申し上げる。

この解説書は，映画教材の作成意図を明らかにし，これを使用して学習し，指導する上での留意点について述べたものである。この解説書がこの映画教材の利用を一層効果あるものにすることを願っている。この第六課「しずかなこうえんで」の解説は，日本語教育センター日本語教育教材開発室日向茂男，同日本語教育研修室石井久雄の執筆によるものである。

昭和54年3月

国立国語研究所長

林　大

# 目　　次

1.　はじめに……1
2.　この映画の目的・内容・構成……2
　2.1.　目的・内容……2
　2.2.　構成——場面を中心として……4
　2.3.　語，語法，構文……28
　2.4.　音声の表記について……30
3.　この映画の効果的な利用のために……31
　3.1.　形容動詞の設定……31
　3.2.　語，語法の理解……35
　3.3.　練習問題……47
4.　形容詞文献抄……54
資料1.　使用語彙一覧……59
資料2.　シナリオ全文……70

## 1. はじめに

この日本語教育映画基礎篇は，初歩日本語学習期における視聴覚補助教材として企画・制作されたもので，この映画「しずかなこうえんで」は，その第六課にあたるものである。

この映画の企画，概要書（シナリオ執筆のための最終原案）の執筆等にあたったものは，次の通りである。

昭和50年度日本語教育映画等企画協議会委員（肩書きは当時のもの）

| | |
|---|---|
| 池尾　スミ | アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター専任講師 |
| 石田　敏子 | 国際基督教大学専任助手 |
| 今田　滋子 | 国際基督教大学助教授 |
| 川瀬　生郎 | 東京外国大学附属日本語学校教授 |
| 木村　宗男 | 早稲田大学語学教育研究所教授 |
| 窪田　富男 | 東京外国語大学教授 |
| 斎藤　修一 | 慶応義塾大学国際センター助教授 |
| 佐久間勝彦 | アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター専任講師 |

日本語教育部（当時）関係者（肩書きは当時のもの）

| | |
|---|---|
| 林　　大 | 日本語教育部長・事務取扱 |
| 武田　　祈 | 日本語教育部日本語教育研修室長 |
| 日向　茂男 | 〃　日本語教育研修室研究員 |
| 水谷　　修 | 〃　日本語教育研究室長 |

この映画「しずかなこうえんで」は，今田滋子委員の原案に協議委員会で検討を加え，概要書にまとめあげてから制作したものである。制作は日本シネセル株式会社が担当した。概要書のシナリオ化，つまり脚本の執筆には同会社前田直明氏があたり，同氏はまたこの映画の演出を担当した。言語演出

の面では，協議会委員及び日本語教育部（当時）関係者の意見が加えられている。

本解説書は，日本語教育センター日本語教育教材開発室の日向茂男，同日本語教育研修室の石井久雄が執筆したが，企画・制作にあたっての意図が十分生きるよう努めた。

現在，この映画は，より多くの人の利用の便をはかって下記九か所において貸し出しを行っている。

- 北海道教育庁指導部社会教育課視聴覚教育係
- 宮城県教育庁社会教育課
- 都立日比谷図書館視聴覚係
- 愛知県教育センター企画管理課
- 京都府教育庁社会教育課
- 大阪府教育庁社会教育課
- 兵庫県教育庁社会教育・文化財課
- 広島県教育庁社会教育課
- 福岡県視聴覚ライブラリー

なお，この映画はそのビデオ版とともに上記制作会社が販売している。

## 2. この映画の目的・内容・構成

### 2.1. 目的・内容

この映画「しずかなこうえんで」は，日本語教育映画基礎篇の全般的方針に従い，利用の便宜を考慮してある。すなわち，この「しずかな　こうえんで」に即して言えば，形容動詞を始めて導入したときに，あるいは形容動詞の基礎事項の導入を終えた後に，補助教材として利用するものと予想して，この映画を企画してある。事実，このような映画教材を利用するとすれば，そのようなし方が一般的であろう。しかし，また，映画を教材の主体として

学習させる場合にも，初歩のある学習段階に到達させることはできるよう，配慮してはある。

主要なねらいは，サブタイトルに「形容動詞」とあるとおり，形容動詞の導入である。実質的な概念をもつ語として，体言という一類すなわち名詞とともに，用言という一類すなわち動詞・形容詞・形容動詞が重要である。動詞は第五課「なにをしましたか」で，形容詞は第三課「やすくないです　たかいです」で，それぞれ導入してあり，この課で用言導入はひととおり済むことになる。

ほとんどの日本語教科書がそうであろうように，この日本語教育映画基礎篇も，用言のうちでは形容動詞を最後に出すこととなった。日本語の中にあって，あるいは用言の中にあって，形容動詞というのは特異な存在である。形容動詞というその名が象徴するように，形態的には動詞に近く，意味的には形容詞に近く，要するに両者の間の子である。それならば，動詞と形容詞とを学習してから形容動詞の学習に進むのが当然であり，その当然の理に従ったまでである。

形容動詞の存在の特異性は，また，それを認めるべきか否かという議論があって，その議論がいまだに決着を見ないところにも，象徴的に表われている。そういう議論があるからと言って，日本語教育の側がその決着を待っていることはできないし，待つ必要もないのである。繰り返し言うが，形容動詞は用言のひとつであり，用言の中にあってもあなどることのできない地位を占めている。しかも，形容動詞という一品詞の認否にかかわらず，どのみち，現在まで既に形容動詞と言われてきた一群の語が，特異性を失うことはないのである。

視聴覚教材を通して教える形容動詞として，意味が感情に関わるものよりも属性に関わるものの方が穏当であること，形容詞とえらぶところがない。日本語教育映画基礎篇第三課「やすくないです　たかいです」における形容詞導入に当たっても実際そのことを踏まえていたのであるが，この課における形容動詞導入に当たっては，あえてそのことを破ってみた。ひとつの実験と

いう意味もあるが，形容動詞の基本的なものに，属性的なものがなかったためでもある。しかしながら，この課に出したものは，その個々について，画像から意味を把握することができるよう，配慮を怠らなかったつもりである。

## 2.2. 構成——場面を中心として

**2.2.1.** 映画を場面に区切り，せりふを挙げ，それらについて注釈を加えていく。

場面及びせりふ，また注釈については次のような記号を与える。

1. 映画の構成に従って，場面を分けるときには順にⅠ，Ⅱとし，それを更に小場面に分けるときには，Ⅰ－1，Ⅰ－2，Ⅰ－3，……のようにする。
2. せりふを文に切った上で，その一文一文を，初めから終わりまでの通し番号によって，順に①②③のようにする。せりふの文を参照して注釈で新たな文を与えるときは，その参照したせりふの文の通し番号に′印を加え，例えば①′，②′のようにする。せりふの一文にいくつも新たな文を与えるときは，′印を重ね，例えば①′，①″，①‴のようにする。

文の認定については，多少問題のあるところもあろうが，立入ることはしない。なお，文の通し番号は，資料の使用語彙一覧及びシナリオ全文においても共通するものである。

**2.2.2.** この映画は，「しずかなこうえんで」というタイトルが示す通り「こうえん」が主要な舞台である。若い男女の公園での散歩が描かれるのであが，二人はにぎやかな商店街を通り抜け，静かな公園へやってくる。そこで，商店街を場面Ⅰ，公園を場面Ⅱとする。場面Ⅱは，映画の大半を占めているので，対話の内容に従って更に小分し，順にⅡ－1，Ⅱ－2，……，Ⅱ－7とする。ただし，注釈を加えるときに更に細分したものがある。

場面Ⅰは①②，場面Ⅱは③から㊺までのせりふがある。

## I　商店街で

人通りが多く，アーケードのあるにぎやかな商店街である。人々の服装は晩秋から春を思わせるが，後の公園の風景によれば春先であることがわかる。主人公となる若い男女の連れが現われる。その服装には既に冬めいたところがない。

男「①にぎやかですね。」

女「②ええ，にぎやかな通りですね。」

「にぎやか」というのは，人出が多くて活気づいている様子を指している。そのために，画面に人出を映し，音響も入れてあることに注意したい。単に人のみ多い，例えばラッシュ・アワーの駅などの様子は，「にぎやか」とは言わず，また，音響だけが大きい様子は「うるさい」である。そういう意味をもった①と②の「にぎやか」は，構文上また形態上で，異なっている。構文上，①のものは「＿＿です」の形で言い切り，②のものは「通り」を修飾する連体用法である。形態上，①のものは語幹のみの形であり，②は連体形語尾を伴った形「＿＿な」である。

①末尾の「ね」は，相手に同意を求めている助詞である。その求めに応じて，②冒頭の「ええ」が出てきている。にぎやかであることに同意したのである。②末尾の「ね」は，相手に同意したことを示す助詞であり，「ええ」と重複するところがあるが，重複しても，同意を求める「ね」には，「ね」を以って応ずるのが自然であり，重複をどうしても避けようとするならば，かえって「ええ」を省く方がよいと言えるであろう。

②冒頭の返事「ええ」は，肯定の返事としては，女性にとって普通であるし，男性もよく用いるものであるが，用いる者が女性であるにせよ男性であるにせよ，返事をする相手が目上であるならば，失礼である感じもあるので，用いないのが無難である。形式張った場面では，男性，女性ともに「はい」を用いる。逆に言えば，ここに登場した男性と女性は対等の関係で，ある程度親密であるということである。更に親密になれば，

①′にぎやかだね。

②′ ええ，にぎやかな通りね。

のように「です」を用いず，その親密さで男女が入れ換われば，

①″ にぎやかね。

②″ うん，にぎやかな通りだね。

のように男に「うん」が見られるはずである。⑨の「うん」，㉚の「はい」を参照されたい。

## II　公園で

ざわめきから一転して無音の状態，小鳥のさえずりがかすかに聞こえるだけである。人影も余りなく，商店に代わって木々が立ち並ぶ。中央から向かって左手前へ歩道らしきものが通り，それをこちらへ歩いているのは，先ほどのふたりである。カメラは，更にこのふたりをも離れ，向こうに木々の見える池を映し出す。恐らくは都会の喧噪の真ん中にあって，しかしなお閑静なたたずまいをとどめる公園である。以後の場面は，この公園内のものと考えてよい。

### II－1　静かな公園

カメラが動き続けて公園内の風景を映しているところに，ふたりの声だけがはいる。

男 「③ここは静かですね。」

女 「④ええ，静かな公園ですね。」

③の「ここは」は，若い男女が今現にいる公園を指している。そうして，「先ほど歩いていた商店街のにぎやかさに比べれば」，すなわち「あそこの商店街はにぎやかですが」という，対比の意味合いを含んでいると言ってよい。そのような，

にぎやか　⟷　静か

商店街　　⟷　公園

という対比を含んで，さて，③の「ここは」を除くならば，①②と③④と

は，構文上また形態上でパラレルである。このパラレルな繰り返しを通して，言い切りの構文および形容動詞語幹の形態，連体修飾の構文および形容動詞連体形の形態を，学習者に会得させようとするのである。①の冒頭に「ここは」付け加えて，あるいは③の冒頭の「ここは」を省いて，また①③の冒頭を改めて

①‴（この）通りはにぎやかですね。

③′（この）公園は静かですね。

として，②④を組み込んで練習すれば，一層理解し易いであろう。

カメラが白い建物を写し出す。なんの建物であるか，画面から明瞭であるとは必ずしも言い難いが，その構内の門の近くに見えるオギュスト・ロダン「考える人」像と，構内の雰囲気とから考えて，美術館である。

「考える人」像は日本では国立西洋美術館と京都国立博物館とが据え，ここの画面はその前者である。ただし，この画面を除いて他の画面の公園は井之頭公園であり，全体の構成上こういうことになったのである。

女 「⑤あの立派な建物は何ですか。」

男 「⑥美術館ですよ。」

男女ふたりは，画面には出てこないが，その画面すなわちカメラの位置から考えて，美術館の構外，少なくとも道一本は隔てたところに立っているのであろう。やや距離があるので，⑤冒頭の対物的な直接指示は「あの」である。ただし，この程度の距離であるならば，「この」でもよい。「こそあど」については，学習は第一課「これはかえるです」で済み，説明は「日本語教育映画解説１」に詳しい。その第一課に，坂本という男がタクシーに乗って運転手に話しかけている場面がある。

坂　本「㉒あれは何ですか。」

運転手「㉓どれですか。」

坂　本「㉔あの建物です。」

運転手「㉕あれはホテルです。」

坂　本「㉖ああ，そうですか。」

この場合は，㉒㉔および㉕の「あれ」「あの」を「これ」「この」で置き換えることができない。坂本も運転手も支配し得ない遠い領域に，その建物があるからである。

⑤「立派な」は，画面からは必ずしも理解し易くはない。建物の外観についてのことであるので，構えは均斉がとれて大きく，汚らわしさを感じさせたりしない，ということにでもなるであろうか。人物・態度・業績・生活などについてよりはまだ理解しようがあろうが，映像の言語に対する限界というものを思わせられる。

⑥末尾の終助詞「よ」は，相手に教えているという感情が出たものである。ここでのイントネーションは下降。ひとに教える時にこの「よ」を使うことは，余り好ましいことではない。押しつけがましさを感じさせるものであり，相手への批難の感情を含み得るものでもあって，相手が目上であれば失礼である。イントネーションを上昇にすれば，相手の言葉を納得し兼ね，念のために改めて自分の言わんとするところを言った，ということになる。上に引用した第一課の運転手の言葉㉕も，客という一種の目上の人に対するものである以上，「よ」が付かないのである。坂本という男の言葉㉔にしても，「よ」を付ければ，運転手の質問㉓に対して，「どれかなど，そんなことが判らないのか」という批難を浴びせることになり，ものを尋ねている立場からも，そうはならないのである。運転手の㉕の「ホテル」で納得できなかったならば，坂本という男は，㉖で「あの白い高い建物ですよ。」とでも，上昇のイントネーションで言っていたであろう。この画面の⑥で「よ」は気軽に使われたものと思われるが，そうであるならば，この男女は親しいということである。

### Ⅱ－2　自転車に乗った子供

画面には，自転車に乗っている子供たちを映し出す。そのひとりが倒れるときに，女の声。

女 「⑦あっ，危ない。」

冒頭の間投詞「あっ」は，驚きに一瞬襲われたときに発する。男で，その驚きをもう少し抑えていれば，「おっ」ともなる。「ああ」は，感動を一般的に表わし得，驚きに対しては，その驚く対象の動きが一瞬よりも長く持続しているときに，よく使われる。

男女ふたりは，倒れたその子供を助け起こし，子供の服に着いた土を払い落としながら，子供を元気づける。

男 「⑧大丈夫？」

子供「⑨うん，大丈夫。

⑩どうもありがとう。」

⑧の音は，映画ではダイジョブに近く，すなわち「丈」に当たる部分が短音である。「大丈夫」という語の，規範としての音は，もとよりダイジョーブである。この映画で短音となってしまっているのは，元気づけを込めた問い掛けであるためであろう。イントネーションは上昇である。⑧をダイジョーブのように長音として問い掛けたならば，その問い掛けすなわち気遣いは，元気づけの色合いを失って，本格的になってしまう。問い掛けの気遣いよりも，更に元気づけを強調するのであるならば，下降のイントネーションで，「大丈夫，大丈夫」のように繰り返し，その「丈」がかなり長めの長音にまでなり得る。⑯⑰の「大丈夫」と比較されたい。

⑧の「大丈夫」は，形容動詞の語幹が，語尾を伴わないでそのまま現われたものである。次の⑨の「大丈夫」もそうである。⑦も，形容動詞を用いて，例えば，

⑦′ あっ，大変。

のように言うことができる。ついでながら，①「にぎやかですね」及び③の「静かですね」の形容動詞も，文法上はその語幹に助動詞「です」および助詞「ね」のついたものである。形容動詞の語幹については，ここでは詳しく述べない。3.1.を参照されたい。

⑨冒頭の返事「うん」は，親密さからよりは，形式張らないところから出たものである。②冒頭の返事「ええ」について述べたところを，参照されたい。形式張らないことに対応して，⑨の続きも「大丈夫です」でなくて「大丈夫」であり，更に続く⑩も「どうもありがとうございます」でなくて「どうもありがとう」である。ここを形式張ると，子供らしさ，あるいは子供としての元気な明るい様子といったものが，失われてしまうことになるであろう。言葉の上での形式よりは気持ちのこもった言葉を，子供には期待すべきであろう。

なお，この子供の⑨⑩の発音は，子供の言わば舌足らずな発音の，典型のようなものである。日本語の発音を日本語学習の最初にみっちり仕込まれた学習者でも，決して聴き取り易くはないはずである。今の段階の学習者にその聴き取り能力は不必要であろうし，まねて発音できる必要も更にない。指導者においては，さまつにこだわらず，学習者が理解できなくとも焦らぬことである。

自転車に乗っていて倒れた子供は，助け起こされ，再び元気に自転車に乗って去っていく。

### Ⅱ－3　元気な子供たち

ジャングルジムやブランコが画面に映る。遊んでいる子供たちの姿，ベイビー・カーを押している若い母親たちの姿がある。公園の遊び場である。相撲を取る子供たち，組み合うふたりと行司役のひとりが，映り，そこに男女の声がはいる。

男　「⑪子供は元気ですね。」

女　「⑫ええ，子供はみんな元気に遊びますね。」

⑪の文は，形容動詞を含んだ「＿＿は＿＿です」の基本的構造である。③も同様であったが，「＿＿」の部分が「ここ」であるよりもこの「子供」である方が，ひとつ理解し易いであろう。

その⑪に対する⑫の受け答えも，

⑫′ ええ，元気な子供ですね。

であったならば，⑪⑫′のやりとりは，③④あるいは①‴②のやりとりと構造が同様であったが，⑫′はこの場面にそぐわない。①②および③④が，①‴③′に「(この)」を補ったとおり，「通り」および「公園」の特定のものについて言っていて，⑫′もやはり「子供」の特定のものについて言うことになるところを，⑪すなわちこの場面における「子供」は，一般的なものとして言っているからである。⑫の「子供」も，一般的なものとして言っている。ここでの形容動詞は連用形「＿＿に」である。この課で提出する形容動詞は，以上で形態上の基本を尽くすことになり，以下は応用である。

「元気」には，基本的な意味として，「なにかをしようとする気持ちが充分あり，実際に活発に動いている」および「病気をせず，健康でいる」の二つがある。ここの場面での意味は前者であるが，後者も，「お元気ですか」とか「お元気で」とかの形で，特に挨拶としてよく使われる。この挨拶は，今までしばらく会っていなかったとか，これからしばらく会えないとかいうときに言うものであり，また年配の人に対して言うべきものではなく，注意をする必要がある。

⑫の「みんな」は，品詞としては名詞であり，用法としては副詞的である。名詞を副詞的に使用するものに，「きょう本を読む」のような時に関する語や「本を一冊読んだ」のような量に関する語やがあり，時に関する語については「日本語教育映画解説５」に述べてある。「みんな」は，量に関する語と言ってよい。しかし，「一冊」「すべて」などと異なり，「＿＿の」という形で，同義のままで名詞を修飾することができない。

本を一冊読んだ。

一冊の本を読んだ。

は，後者にあいまい性があるとしても，両者が同義になり得るが，

本をみんな読んだ。

みんなの本を読んだ。

は同義となり得ない。

⑫′ みんなの子供は元気に遊びます。

では，「みんな」はその子供の親全員を指すことになる。なお，「みんな」の基本的意味は，人に関する。それゆえ，「本をみんな読んだ」の「みんな」は，本全体，またはある人々全員を指し得，「みんなの本を読んだ」の「みんな」は，その本の所持者全員をしか指し得ない。

画面は再び男女ふたりを映す。子供についての会話である。

男 「⑬子供は好きですか。」

女 「⑭ええ，好きです。

⑮ほら，あの子。」

⑬の「子供」は，「好きです」の対象を示している。

⑬′ 子供は嫌いですか。

などでも同様で，格助詞「を」をとることのできない形容詞・形容動詞では，格助詞「が」あるいは副助詞「は」で示されるものが，対象であるのか主体であるのか，動詞以上にあいまいさを免れ難いのである。この構造については，第八課「どちらがすきですか」で扱うこととする。

⑬の構造は形容動詞を述部とする疑問文であり，⑭はそれに対して形容動詞を述部として答えている。答え方として，例えば，

⑭′ ええ。

⑭″ （ええ，）好きです。

⑭‴ （ええ，）子供は好きです。

などの形があり，

⑭⁗（ええ，）そうです。

も考え得るが，自分について問われているときは ⑭⁗ は用いないのが普通である。自分について問われているときは，形容詞・動詞を述部とする疑問文に対してもそうであり，名詞を述部とする疑問文に対しては却って ⑭⁗ である。

⑮は，⑭から時間的にやや離れて発されていて，話題も移っている。冒頭

の「ほら」は，感覚を鋭くするよう，注意を促す間投詞である。⑮も，

⑮′ ほら，見て下さい。あの子。

のように，「見る」という感覚に関する語を補うことができる。「あの子」は，⑮′から分かるように，「見る」という省略された動詞の対象でもあり，「あの子が……」という主体でもあり得て，言わば超格である。

⑮の「子」は，単独では普通は用いられず，⑮の「あの子」のように連体修飾語を伴い，あるいは「親と子」のような小さな句の中で用いられる。単独でその意味を表わすのは，⑪⑫⑬の「子供」である。「子供」を⑮の「子」のところに置き換えることはできるが，不自然さをもっている。

画面は「あの子」の方に転ずる。「あの」と言っているのであるから，男女ふたりから離れているのであろう。男女と指示対象との関係は，⑤の「あの建物」と同様，画面からはにわかに判断し難い。第一課以来の「こそあど」の学習を応用して，想像をたくましくしておくべきである。画面にアップで映る「あの子」は，よちよち歩いている幼児である。

男　「⑯大丈夫かな。」

女　「⑰大丈夫。

⑱上手ですよ。」

⑯は，よちよち歩きで転びはしないかと案じた言葉。その心配である気持ちを表わしているのが，末尾の終助詞「かな」である。この終助詞は，聞いている人に「どうであろうか」と問い掛けつつも，不安を表わすことが主である。女性であるならば，聞いている人のあることを考えて，「かしら」の方が適切であろう。「かな」「かしら」ともに，形容詞・動詞には連体形に続き，形容動詞には語幹に続く。

### Ⅱ－4　ブランコをこぎながら

男女ふたりは，ブランコの方へ歩いていき，女がブランコをこぐ。そのこぎ方についてふたりが一言ずつし，また，隣でブランコをこいでいる幼児に

ついても一言ある。

男　「⑲上手ですね。」

女　「⑳いいえ，余り上手じゃありません。」

男　「㉑あの子はまだ下手ですね。」

⑳は，⑲の形容動詞「＿＿です」の肯定の言い方と対になった，否定の言い方「＿＿じゃありません」を含んでいる。この「＿＿じゃ」は，形容動詞連用形「＿＿で」と副助詞「は」との融合したものである。「日本語教育映画基礎篇」で出したのは初めてのことで，いままでのし方に従えば，

⑳′ いいえ，余り上手ではありません。

となる。⑳′ は，名詞の「＿＿ではありません」という否定の言い方の応用となる。第一課「これはかえるです」には，

⑦いえ，たばこではありません。

㉑いいえ，あれはわたしの荷物ではありません。

が出ている。口頭の言葉としては，特に日常的には，「じゃ」の方がむしろ普通でもあろう。「じゃあ」と母音を延ばすこともある。第一課のものも，

⑦′ いえ，たばこじゃ(あ)ありません。

㉑′ いいえ，あれはわたしの荷物じゃ(あ)ありません。

のようであってもよい。

形容動詞の否定の言い方としては，⑳のように名詞のそれを応用するほか，形容詞のそれ「＿＿ないです」を応用することもできる。

⑳″ いいえ，余り上手で(は)ないです。

あるいは，

⑳‴いいえ，余り上手じゃ(あ)ないです。

のようである。この映画で形容動詞の否定の言い方を出すのは⑳のみであり，ここで⑳″ あるいは⑳‴の言い方を採らなかったのには，理由が二つある。

第一，名詞の否定の言い方とともに，⑳′あるいは⑳の方が，⑳″あるいは⑳‴よりもよく用いられるように考えたためである。第二，形容動詞の活用形としては，特に連用形「＿＿に」および連体形「＿＿な」が特徴的であっ

て，その他の活用形は，語幹の独立性について習得できていれば，名詞または副詞に関するいろいろな言い方の拡張として捕えることができる，と考えたためである。形容動詞の連用形「＿＿で」は，その，名詞または副詞に関する言い方の拡張として捕えてよいものに属している。

⑳の否定には，副詞「余り」が伴っている。「余り」は，いわゆる陳述の副詞として，否定の表現とともに用いられる。意味は，「わざと言うほどには，大して」ということである。しかしながら，従属文のうちにおいては，そうばかりは言えず，「度を過ぎて，非常に」という意味で，肯定の表現とともにも用いる。たとえば，

余り上手であるので驚いた。

のようである。「余りに」と「に」を伴えば，否定の表現とともにでなくとも主文で用いることができ，やはり「度を過ぎて，非常に」という意味で，

余りに上手である。

のようであるが，これは形容動詞連用形，あるいは別の一副詞とみなすのがよいかも知れない。「余り（に）」は，「あまり（に）」とも「あんまり（に）」とも言う。この映画では前者である。

⑲⑳の「上手」と㉑の「下手」とは，ともに形容動詞である対義語である。ここではブランコのこぎ方について言っている。画面では特に女のこぎ方がはっきりとは分らないが，脚をうまく使ってブランコをこいでいるかどうか，という問題である。隣の子供は，ブランコの台に座ったままで，足を全く使わないでいる。

ところで，「上手」「下手」は，と言うより言語表現あるいは概念というもの多くは，一般に相対的である。

下手なブランコ（のこぎ方）だが，子供としては上手である。

ということにもなる。基準によって評価は変化するわけで，

小さい象も大きい動物だ。

空を回る天体は止まっている。

現代は2000年後の中世である。

のような表現がいくらでもあり得る。基準を示して相対性をめいりょうにするために，ヨーロッパ諸言語などでは比較級・最上級の類が見られるが，日本語では副詞および格助詞「より」を用いる。日本語における比較の表現についても第八課「どちらがすきですか」で扱うこととし，ここでは立ち入らない。なお，㉑の「まだ」は，時間的な意味「今のところ」で用いられているが，

甲も下手だが，乙はまだ下手だ。

のように比較を表現するときの副詞となり得る。

㉑冒頭の「あの」は，疑問のあるところである。画面からするとすぐ隣にいるのであるから，「その」の方が適しているように思われる。もし「あの」が正当化されるとすれば，㉑が男から女へ向かっていわゆるひそひそ話して行われたときであろう。

### Ⅱ－5　桜の下で

画面は満開の桜である。そのまま，男女を映さずに，男女の一言ずつが入る。女の二言目のところで，桜を指差しながら階段を降りていく男女の姿が，画面左下に入る。

男　「㉒きれいですね。」

女　「㉓ええ，きれいな花ですね。」

女　「㉔きれいに咲きましたね。」

㉒の「きれい」は出自から言えば漢語であるが，和語「美しい」などに比してはるかに口頭語的である。一般に，和語の方が口頭語的，漢語の方が文章語的，というようなことがあるが，常にそういうわけであるのでもない。和語が文章語においても衰退してしまっていることもある。

商人　　あきんど

翌日　　明くる日

洗濯　　洗い濯ぎ

なども同類である。もっとも，こういう場合の和語と漢語とに多少の意味の

ずれがあるのも普通で，例えば，「きれい」の方が「美しい」よりも清潔・整頓の感じを伴ない易く，「片づける」を連用修飾するのは「きれい」である。

㉒に対し，㉓が「ええ」で同意をしている。㉒㉓の組み合わせは，①②の組み合わせに並行している。

㉓が「きれい」を「花」に対する連体修飾としたのに対し，㉔は「きれい」を「咲く」に対する連用修飾とした。形容動詞による連用修飾は，⑫「元気に遊びますね」で既出である。

㉔の末尾「咲きましたね」の「た」は，時制の上からは言わば現在完了，完了時制の用法としては継続，ということに，英語文法をなぞるならばなるであろう。助動詞「た」については，第五課「なにをしましたか」で扱っているので，参照されたい。

## II－6　ベンチの上の忘れ物

木々の間の小道を男女が歩いてきて，女の方がベンチの上に目を留める。

女　「㉕あらっ，忘れ物。」

冒頭の「あらっ」は，上昇のイントネーションをもち，「なにであろうか」「どうなっているのであろうか」という気持ちを伴う，気づいたときの言葉。女性しか用いない。男性ならば，「あれっ」であろう。「忘れ物」と言って指しているのは，画面で女の頭の向いた方，すなわちベンチの上に置かれているものである。それは少なくも自分のものではない。仮りに，女が男の顔でも見ながら，

㉕′ あっ，忘れ物。

と言ったとして，これと比較してみる。㉕′においては，冒頭「あっ」は，驚きの気持ちを伴って気づいたことを示し，「忘れ物」は，自分のもので，どこかに忘れてきてしまって，いま自分のいる場所にはないものを，指すことになるであろう。

女がベンチの上のものを取り上げる。画面には，派手な模様のそれが映し出されるが，一体，何であるのかよくわからない。男の声が入ってノートであることがわかるのであるが，続く女の一言は，一体，何であろうかという画面の印象に，応ずるものである。

男　「㉖ノートですね。」

女　「㉗変なノートですね。」

㉗冒頭「変」が，画面からの印象に応ずるものである。すなわち，「変」は，普通と違っているという意味である。

男女ふたりに話し掛けるように少年の声が入り，画面右手から少年が現われる。ノートの持ち主である。身体大きく，中学生ということになろう。少年は，ノートを受け取るや，礼を言って，直ちに再び画面右手へ走り去って消える。

中学生「㉘あの……。」

女　「㉙これですか。」

中学生「㉚はい。

㉛大切なノートです。

㉜どうもありがとう。」

㉘「あの……」は，講演などではなくて相手との受け答えを期待して話しをしようとするとき，しかもその相手と特に知り合いでないとき，最初に話す側から，話し掛けの意志を示すものとして用いる言葉である。「あのう……」と最後を延ばしてもよく，ここでも実は延びているようにも聞こえる。第二課「さいふは　どこにありますか」では，

①あのう，地下鉄の入り口はどこにありますか。

⑯あのう，事務室はどこにありますか。

のように出てきた。この映画の㉘では，第二課①⑯の後半に当たるものがないが，「そのお持ちになっているノートなんですが，それぼくのです」などと言おうと思っているうちに，話し掛けた相手の女が意を察した，というこ

とであろう。

㉙の構文「＿＿は」の伴わないもの，補うとすれば「あなたのおっしゃ（ろうとしてい）るものは」といったところであろうが，わざわざ補えば仰々しい。第一課「これは　かえるです」に，

㉚坂本さんのカバンはあれです。

㉛これですか。

というところがある。やはり，㉛の前に「坂本さんのカバンは」というように補っておく必要がない。

㉙の「これ」は，女が現に手にしているノート。㉙の問いに，㉚の答え。「ええ」が，今までに見たごとく，同意を示す傾向をもつのに対し，「はい」は，㉙の問いに，同意と言うよりは，肯定で断言した趣きをもつ。いわゆるきっぱりとした感じをもつ。この場面での㉙に対するものとしては，それで自然であろう。

㉛「大切」は，どれくらい大切であるかということを，少年が走ってきたことで示している。すなわち，真に大切なものであるのであるが，「大切」という言葉は，また，この場面においては，礼儀上の意味合いをももち得ている。せっかくひとが取り上げてくれたノートである。仮りに失ったところで大した損害を被るものでないとしても，単に「自分の」とか「なくした」とか言うよりも，あるいはまして「なくしてもよかった」などと言うよりも，拾っておいてくれたことについて，助かったという感謝の気持ちが表われるのである。それゆえにこそ，次ぎの㉜の感謝そのものの表現も，素直につながって生きているのである。

## Ⅱ—7　こい

こいが幾匹も泳ぎ回っている。この場面では，映像は泳ぐこいのみである。

男　「㉝いろいろなこいがいますね。」

女　「㉞ええ，大きなこいや小さなこい，沢山いますね。」

㉝「いろいろ」は，数多くのもの，ここではこいについてのある特徴，例えば色に着目して，その特徴の中に多様性があること。画面からは，実際，いろいろな色のこいがいるという印象を受ける。

㉞は㉝の「いろいろなこい」の「いろいろ」を具体化したものであり，しかし，画面からの印象を裏切って，「大きなこいや小さなこい」となっている。

㉝「こいがいる」の「いる」は，主体が動くものであるからで，「ある」ではない。

㉝′ いろいろなこいがありますね。

では，「こい」は，例えば，料理の材料やし方としてのこいとか，図鑑の絵として載っているこいとかになってしまう。「いる」「ある」については，第四課「きりんはどこにいますか」に詳しいので，参照されたい。

㉞の「大きな」「小さな」は，連体修飾語であり，しかも「＿＿な」の形を取っている。一見形容動詞連体形「＿＿な」のようでもあり，起源としては実はそうなのであるが，活用がなく連体詞である。学習者の立ち場からは理解に苦しむものであるが，また形容詞「大きい」「小さい」があって理解を更に苦しめるものであるが，形容動詞の例外的事項としてでも覚えさせておくのがよい。英語文法式で言えば，限定用法しかもたない形容動詞ということになる。

㉞「大きなこいや小さなこい」の助詞「や」は，前後をつなぐ働きをしているが，つなぐ働きという点では同じであっても助詞「と」とは異なる。「甲や乙」の場合には，その他丙丁などがあるという含みをもち，「甲と乙」の場合には，甲および乙の二者に限定され，例えば，

㉞′ 大きなこいと小さなこい，沢山いますね。

では，こいが沢山いても，大きいこいか小さいこいかだけであって，中くらいの大きさのものはいない，ということになる。

㉞「沢山」は副詞である。「沢山」は，しかし，形容動詞でもあり，「沢山にいますね」「沢山なこい」という言い方が可能である。㉝の「いろいろ」

も，㉝においては形容詞であるが，副詞でもあり得て，

㉝″ いろいろこいがいますね。

では副詞である。形容動詞かつ副詞である語がいずれの品詞で用いられているか，という判定は，語尾を伴った「＿＿に」であるか，語尾を伴わない「＿＿」のみであるか，ということになる。3.1.を参照されたい。また，単に副詞であるのみであって「＿＿に」の形をもつものもあり，3.2.1.を参照されたい。

画面は赤いこいを一匹追い始め，男女一言ずつ。次いで薄橙色のにしきごいを一匹追って，女が一言。

女　「㉟あれはきれいですね。」

男　「㊱きれいな赤いこいですね。」

女　「㊲こちらのは立派なこいですね。」

㉟「あれ」と㊲「こちら」との対比があるが，両者の位置関係を画面で把握することはまず不可能である。そのことを利用して，第一課「これはかえるです」以来学んできた「こそあど」の復習をすることもできるかとも思われるが，「こちら」が初出である。「こちら」に関わる位置関係は，「これ」に関わる位置関係と同じくないので，画面から外し，第八課「どちらがすきですか」に譲ることとする。「こちら」に関わる位置関係とは，次のごとくである。すなわち，「こちら」「そちら」「あちら」は，ある基準位置を設定し，対照して，自分の支配領域に基準位置より近ければ「こちら」，相手の支配領域に基準位置より近ければ「そちら」，自分および相手の支配領域より基準位置から遠ければ「あちら」，というような相対的な意味をもっている。そうして，㊲の「こちら」は，正しく，そのようなものであると解するのが自然である。その「こちら」に対して基準位置となっているのは，㉟の「あれ」すなわち赤いこいである。

㊱「きれいな赤いこい」は，連体修飾語二つが一つの被修飾語に係っている例である。

㊱′ 赤いきれいなこい

㊱″ きれいで赤いこい

㊱‴赤く（て）きれいなこい

でも意味は変わらないが，㊱″の形容詞連用形「＿＿で」および㊱‴の形容詞連用形「＿＿く（て）」の中止法は，この課までに扱わない。ここでは，㊱㊱′により，修飾語が被修飾語に先行する限りは修飾語間の語順は問わないという日本語構文の大原則を提出するのみに留めることとする。ただし，3.3.の練習問題のD.を参照されたい。

なお，形容動詞連用形「＿＿に」は，形容詞連用形「＿＿く」と異なり，

花は赤く咲いた。

花は赤く，実は青い。

の第2行に当たる用法いわゆる中止法としては，使用することができない。その用法は，いまひとつの連用形，上の㊱″に挙げた「＿＿で」によって行なう。連用形「＿＿に」は，連用修飾にしか用いないものと，心得ておくべきである。

㊱「赤い」は形容詞で，色に関する「白い」「黒い」「青い」「黄色い」も形容詞である。もっとも，形容動詞「黄色」もある。しかも，これらの語幹に接頭辞「真（まっ）」を加えると，形容動詞「真赤（まっか）」「真白」「真黒」「真青（まっさお）」「真黄色」となる。形容詞「真白い」「真黒い」もあるが，色の形容詞「＿＿い」と形容動詞「真＿＿」との関係については，後々注意させる必要がある。形容動詞と形容詞との意味上の関連をうかがわせる例でもある。

㊲「こちらの」の「の」については，形容詞に関連して既習である。第三課「やすくないです　たかいです」に，

③えーと，青い（色）の（ベッド）はないですね。

というのがあった。

画面は再び幾匹ものこいを映し，次いで橋とその近辺の恐らくは池。男女がその池を覗き込み，指を差したりなどしている。こいは公園の池のこいであった。

## II－8　ジュースを飲む

映像は休憩用ベンチ。ひと昔前の東屋に当たるところである。手前左手に売店。そこへ右手から男女が現われ，ベンチに並んで腰掛ける。歩き回ったのでひと休みしよう，ということになったのであろう。のどでも潤そうかという話しである。

男　「㊳ジュースはいかがですか。」

女　「㊴ええ。

㊵じゃあ，オレンジ・ジュースをお願いします。」

㊳の「いかが」は，「どう」のていねいな言い方。もっとも，㊳の「＿＿ですか」のような場合にそう言えるのであって，「いかがしましょうか」のような連用修飾の場合には，形式張った感じが加わる。さて，「どう」あるいは「いかが」は，用言や文を問うものである。「何」が普通は名詞を問うたり，発言全体を求めたりするのに対し，それ以外のさまざまな問いを行うと言ってもよい。従って，例えば，いま㊳の前に一言ずつ加えて，

Ⓐ　なにか飲みましょうか。

Ⓑ　そうですね。

㊳′　ジュースはいかがですか。

としたとしてみる。すると，㊳と㊳′とは，形の上では全く同じであっても，内容が異なる。㊳′は，なにかを飲むことを前提とし，その飲み物として，ジュースでよいか（よくないか）を問うている。それに対して，元の㊳は，なにか飲むか（飲まないか）を問い，それに重ねてもし飲むならばジュースでよいか（よくないか）を問うている。㊳はⒶと㊳′との二つの問いを含んでいる，と言ってもよいであろう。こうした内容の異なりのために，答えて否定するときのその否定も，異なりを見せる。㊳′に対しては

Ⓒ　コーラの方がいいです。

のようになり，㊳に対しては，Ⓒのようなものも，

Ⓒ′　飲み物はまだ欲しくありません。

のようなものも可能である。もとより，肯定したときのその肯定では，内容

は同じくなる。㊴「ええ」は，㊳の内容とする二重の問いを，ともに承諾したものである。

㊵「じゃあ」は，「じゃ」と末尾が短くてもよい。「では」とも言い，それが元の形で，「では」から「じゃ（あ）」への移行は⑳「じゃありません」の「じゃ」における移行に同じである。そこまでの話題についてはけりが着いたので次の話題に移ると，の意。㊵では，ジュースを飲むことについては決まったので，さて，ということになる。次の話題についての限定はないので，㊵ではどのようなジュースにするかを言っているが，例えば，

㊵′ じゃあ，わたし買ってきます。

とか

㊵″ じゃあ，チョコレートも食べようかしら。

とか言うこともできる。

なお，㊳を言った意図は，誘い掛けと見るべきである。男は，ジュースが飲みたかった，それで一緒にジュースを飲まないか，と誘ったのである。この意図を認めない限り，ジュースという具体性は唐突であり，上のⒶから始まることを期待しなければならない。この意図によるならば，㊴の答えは，

㊴′ ええ，御一緒します。

とすることもできる。もっとも，そこまで言ってしまうと，相手にそっくりならうということになるので，話しを主体的に展開した㊵「じゃあ，……」はつながらなくなる。

㊵「____をお願いします」には，㊳㊴からの展開として，一段飛躍がある。すなわち，「____をお願いします」は，それを自分のために与えよという意味であり，ここでは

㊵′ じゃあ，オレンジ・ジュースを買っていただけますか。

でもさして意味は変わらない。しかも，男がジュースを買ってくることは，㊳㊴から㊵への間では明らかになっていないのである。その間に

男　「なんのジュースにしましょうか。ぼく，買ってきますが，適当なのでいいかな。」

のような言葉があれば，飛躍はなくなっている。世の男女関係からすれば，それは飛躍でなく，当然の前提ということであろうか。ここでは，その飛躍なり前提なりについての理解の上に，「____をお願いします」を理解しなければならない。さもなければ，次に直ちに男が売店へ向かうのが，不可解であることになる。

男がジュースを買うため，ポケットの中の金を探りながら売店へ歩いていく。その後で映像は再びベンチの男女。缶入りジュースを飲んでいる。ふたりとも缶を膝の上へ降ろしたところで，男女のやりとり。

男　「㊶もっといかがですか。」

女　「㊷もう結構です。

　　㊸ごちそうさま。」

㊶「もっと」は，程度が加わっての意。次の「いかが」が，ジュースを飲んでいるという当面の行為を指して，㊶は，

　　㊶′ もっと飲みますか。

と同じような意味になる。ただ，㊶は，㊶′ に比べて，宜しかったらどうぞと勧める気持が強い。「もっと（もうひとつ）いかがですか」「もっと（もうひとつ）どうですか」は，食べ物や酒やを更にどうぞと勧めるときの，決まり文句である。

㊷は，㊶の好意に対し，それを遠慮したものである。この遠慮をはっきりさせているのは，「もっと」との対比に支えられて否定的な意味合いを出している「もう」である。

　　もっといかが（ですか）。

　　㊷′ もう（結構です）。

　　㊷″ もっと（下さい）。

の㊷′と㊷″とを比較されたい。一方，㊷は，「結構です」だけではあいまいである。「結構」は，どうどうしようという申し出に対する答えとしては，日常しばしば誤解を起こしているように，申し出に従うという意味と，

申し出を遠慮するという意味と，相反するふたつの意味をもち得るのである。

㊸「ごちそうさま」は，「ごちそうさまでした」とも言う。飲食を終えたときの決まり文句で，始めるときの「いただきます」とともに，学習者に覚えさせたいものである。㊸は，飲食物の提供者に向けたものとして，提供してくれて感謝している，という礼の意味をももっている。飲食物をもらってその場で飲食しないとき，あるいは飲食物の提供を受けようというとき，「ごちそうさまです」を使うことができる。

ジュースがありますから，お出し致しましょう。

{いただきます。
{ごちそうさまです。

のようである。なお，㊸は，㊶の好意を遠慮した㊷を補い，遠慮の意思をはっきりさせた効果をもっている。

## Ⅱ－9　ゴミを捨てる親子連れ

画面に突然女の声。ベンチに腰掛けている女の声ではない。ふたりが振り向くと，母親と子供の連れである。子供がなにかを道に放ったと見えて，それをなだめながら母親が道の上のものを拾う。そうして，子供をゴミ捨てのところへ連れていって，拾ったものをそのゴミ捨ての中へ入れている。

母親「㊹だめ，だめ，だめですよ。」

母親「㊺カンはここよ。」

㊹「だめ，だめ」は，人の行為をあわてて制止する言葉。間投詞と言ってもよいが，直ぐ後に続く「だめですよ」との関連からは，

だめです（よ），だめです（よ）

の圧縮されたものと考えてもよい。起源的には圧縮されたもの，あるいは形容動詞語幹の重複である。反義の関係に立つものは，副詞を起源とする「そうそう」，また形容詞を起源とする「よしよし」ということになるであろう。形容動詞「だめ」は，無駄とか劣等とか不可能とかの意味をももつが，㊹で

は，もとより，いけないの意味である。空きカンを道に放り投げたりしてはだめですよ，の圧縮されたものと考えられる。だめであるのがなにかを補うときには，「____（し）ては」の形を用いる。

㊹に終助詞「よ」が現われている。子供すなわち話し掛けの相手を説得しようという意図の現われである。続く言葉㊺の末尾にも，終助詞「よ」があり，やはり同じ意図である。

㊺は，「カンはここへ捨てるんですよ」の圧縮。第一課「これはかえるです」の

㊵食堂はどこ（にあるの）ですか。

㊶食堂はあそこ（にあるの）です。

ようなものとは，あるいは第二課「さいふは　どこにありますか」に中心的に現われたものとは，存在の表現に対して移動の表現であるという違いがあるが，圧縮された形においては，質問でも叙述でも同じである。

カンはどこ（へ捨てるの）ですか。
カンはここ（へ捨てるの）です。

彼はどこ（へ行くの）ですか。
彼はそこへ（行くの）です。

存在の表現または移動の表現でなくとも，

彼はどこ（の出身）ですか。
彼はそこ（の出身）です。

彼はどこ（の言語が得意）ですか。
彼はそこ（の言語が得意）です。

のようである。要するに，「____は____です」の構文は，あらゆる表現を圧縮してたどり着くところであり，「____はここです」の構文は，場所に着目した表現を圧縮してたどり着くところである，と心得ておいてよい。ともかく，㊺が存在を表現したものでないことは，画面を通して理解し得ることである。なお，㊺を「カン（を捨てる場所）はここよ。」の圧縮と見ることも

でき，例えば第一課の上記㊵㊶を

食堂（がある場所）はどこですか。

食堂（がある場所）はあそこです。

のように捕えていれば，かえって理解し易いかも知れない。

再びベンチの男女。談笑しているところをズームバックで写しながら，終りとなる。

## 2.3. 語，語法，構文

この映画に使用される語は，基礎的なものばかりであり，当然のことながら形容動詞に属するものが多い。その形容動詞について，基本的な意味の関係をおさえておく便のため，いま国立国語研究所（林大）『国立国語研究所資料集6　分類語彙表』の分類に沿いつつ，語幹のみ列挙して一覧すると，次の通りである。

3.130　イロイロ

3.132　ヘ¬ン

3.134　ダイジョ¬ウブ

ダメ¬

リッパ　ケ¬ッコウ

3.15　ゲ¬ンキ

3.302　スキ¬

3.305　ジョウズ¬　ヘタ¬

3.37　タイセツ

ニギ¬ヤカ

3.502　キ¬レイ

3.503　シ¬ズカ

ただし，「元気」は，『分類語彙表』では「体の類1.3000」にあって「相の類」になく，上では「活発」の分類項目3.15に従って示した。「健康」の分類項目に従うならば3.584となる。

その他現われる語を品詞別に示すことにする。まず形容動詞に最も近い品詞である形容詞から示していけば，次の通りである。

アカイ　アブナイ

次に動詞として，

アソブ　サク　イル　スル

連体詞として，

アノ　オ¬オキナ　チ¬イサナ

副詞として，

タクサン　アマリ　モ¬ット　モ¬ウ　マ¬ダ　イカ¬ガ

接続詞として，

ジャ¬ア

名詞（代名詞も含め）として，

コレ　アレ　ココ　コチラ　ナ¬ン

コ　コドモ　コ¬イ　ハナ¬　タテ¬モノ　ビジュツ¬カン　トオリ¬コウエン　カ¬ン　ノ¬ート　ジュ¬ース　オレンジジュ¬ース　ワスレモノ　ミンナ¬

間投詞などとして，

ア¬ッ　アラ¬ッ　アノ　ホ¬ラ　ハ¬イ　ウ¬ン　エ¬エ　イイエ¬ド¬ウモ　アリ¬ガトウ　オネガイシ「マ¬ス　ケ¬ッコウデス　ゴチソウサマ

助動詞として，

デス　マ¬ス　マ¬シタ　ジャア「リマセ¬ン

助詞として，

ガ　ヲ　ノ　ワ　ヤ　ヨ　ネ　カ　カナ

形容動詞の活用として，いま語幹を＿＿で，語尾を．で，それぞれ表わすならば，

「＿＿」の語幹

「＿＿です」「＿＿じゃありません」の語幹

「＿＿な」の連体形

「＿＿に」の連用形

が現われる。逆に言えば，ナリ活用の

「＿＿で」の連用形

「＿＿だ」の終止形

「＿＿だろう」の未然形

「＿＿だった」などの連用形

「＿＿なら」の仮定形

は現われず，タリ活用も言うまでもなく現われない。ただし，「＿＿で」の連用形は，「＿＿では」の変化した「＿＿じゃ」が「＿＿じゃありません」の中に組み込まれる形で，全く出てこないというわけでもない。以上の現われない活用は，名詞に加える断定の助動詞「だ」を拡張して習得すればよい。しかし，その学習は今後に残されたもので，形容動詞の導入という点からその活用をみるならば，この映画に挙げたもののみで充分である。

つまり，ここでは文構造の中心は，上に挙げた活用のうち，

＿＿

＿＿です

＿＿な

＿＿に

である。「＿＿」および「＿＿です」は，間投助詞「ね」「よ」「かな」を伴うものが多いことに注意したい。

## 2.4. 音声の表記について

映画の実際の音声は，正確に言えばシナリオに書いてあるとおりではない。たとえば，

「⑧大丈夫。」

の「丈」の母音の長さが短いこと，および

「⑨うん，大丈夫。

⑩どうもありがとう。」

の全体がいわゆる舌足らずな発音であることについては，2.2.2.に述べたとおりである。また，2.3.に間投詞として挙げてあるものも，必ずしも文字どおりの発音を行っていないし，そもそも文字とすることの難しいものがあって注意を要する。

## 3. この映画の効果的な利用のために

### 3.1. 形容動詞の設定

形容動詞の活用形は，用言のなかで特異な一点をもっている。それは，終止形と連体形とが同形でないことである。用言は，一般に，鎌倉時代から江戸時代にかけて，連体形が終止形の機能を襲い，終止形が滅んでしまって，形容動詞の終止法としても室町時代・江戸時代には「＿＿な」の形があったのであるが，終止形「＿＿だ」の形も崩れず，今日では終止形は専ら「＿＿だ」となっている。今日の口語の文法で用言一般に対して終止形と連体形との区別を行うのは，この形容動詞のためであるとほとんど言ってよいのである。終止形が連体形と異なり得るのは，形容動詞のほかには，助動詞で，

| | 終止形 | 連体形 |
|---|---|---|
| 推定 | ようだ | ような |
| | そうだ | そうな |
| 伝聞 | そうだ | (欠　如) |
| 断定 | だ | (　な　) |
| | で　す | (で　す) |
| 意志 | (よ)う | ((よ)う) |
| | ま　い | (ま　い) |

といったところであり，前四者は形容動詞語尾に似た語尾をもち，後者は連体形を余り用いないのである。

そのように特異である形容動詞は，また，いかにも解決し難い問題を抱え

ている。その問題は，そもそも形容動詞という品詞を設定し得るか，という根本的なものである。

形容動詞に関わる第一の問題は，全体を一語と認めるか，語幹および語尾をそれぞれ一語として全体的には二語と認めるか，ということである。この問題は，当然，「一語」すなわち語とはなにものであるかという，文法にとって根本的である問題の一つに関わるものである。いまそこまで立ち入ることはできないので，適当な範囲でまとめておくこととして，まず形容詞を全体として一語と認める主な理由は，語幹のみを独立させて用いることはできない，ということである。これに対して，二語と認める理由は，一語と認めたときの語幹は独立的であるという反証である。すなわち，語幹に相当する部分は，

1. 間投詞を作り，また文の中止・終止となり得る。
   ああ，静か。
   公園は静か，商店街はにぎやか。
2. 形容動詞，動詞，名詞を下接し得る。
   好き嫌い　　有害無益
   静か過ぎる
   好き者　　重要問題
3. 助動詞「らしい」「そうだ」「です」に下接する。
   （例省略）
4. 格助詞「の」「と」「より」，副助詞「は」「も」「こそ」「か」「なり」「やら」「など」「ほど」「くらい」「のみ」「ばかり」「だけ」「ながら」，終助詞「か」「ね」「よ」「さ」などを下接する。
   （例省略）
5. 接尾語「さ」「がる」「ぶる」を下接し得る。
   （例省略）

のように用いられるのである。

この議論については，そもそも日本語をどのようなものと考えるか，とい

う根本的なものが横たわっている。上の語幹相当部分の独立性は，現代日本語に顕著なものであり，古典日本語にはさして通常のものではない。日本語を古典から現代へ統一的にとらえようとするのか，現代日本語ならば現代日本語のみで一統一体としてとらえようとするか，というような差異があるわけである。しかも，形容動詞は，日本語を古典からとらえるときには，品詞として副次的である。副次的であるというのは，日本語にもともと備わっていたとは考えられず，他の品詞に属していた一部の語が後世転じて一品詞を形成するに至った，ということであり，副詞，接続詞などもこのたぐいに属する。従って，形容動詞なるものが現代日本語においてさえ揺るぎなく確立し得ているのか，疑問があるわけである。

さて，形容動詞に関わる第二の問題は，第一の問題を一応処理して二語と認めるとした時，その二語の品詞は何であるかということである。一語とした場合の語尾に相当する部分については，助動詞ということでそれほど議論の余地もないようであるが，いわゆる断定の助動詞「だ」と同一視することには多少の問題があるといえよう。「静かに」の「に」に相当する活用形は断定の助動詞「だ」にはないし，「静かな」の「な」に相当する活用形は「本なはずだ」「本なのである」のような限られたものにしか現われない。「本なはずだ」は「本のはずだ」というのが今では一般的な言い方であろう。こうした問題はほとんど議論されていず，それというのも，この問題が，形容動詞を一語とした場合の語幹に相当する部分が何であるかという問題に吸収されているからである。

一語とした時の語幹部分の独立性について上に述べたことから知られるように，その部分は多分に名詞的あるいは副詞的である。名詞的であるにせよ副詞的であるにせよ，第1点から第5点までの特徴はほぼ共通であるのであるが，そうであるからと言って，名詞なり副詞なりとしてすべてを統一的に処理することができるかとなると，またそうもいかないのである。そのことは，第2点における副詞性ということが特殊であり，あるいは第4点における名詞性ということが例えば格助詞一般については言うことができず，更に

細かくみるならば語幹部分ひとつひとつごとに性格が異なっているとさえ言ってもよい，というところにうかがえるのであるが，いま，第1点だけを展開させることから，そのことを理解してみる。すなわち，第1点によって孤立させた語幹部分について，連体修飾語を取り得るか，連用修飾語となり得るか，ということをみると，前者のみが肯定されるのであるならば名詞であり，後者のみが肯定されるのであるならば副詞である，と結論することができるであろう。しかしながら，そう考えた結果は，語幹部分は概略三分類されるのである。

1. 連体修飾語を取り得，連用修飾語となり得ない。
   好き　元気
2. 連体修飾語を取り得ず，連用修飾語となり得ない。
   静か　にぎやか　変　きれい　立派
3. 連体修飾語を取り得ず，連用修飾語となり得る。
   いろいろ　結構

のようである。1.を名詞とし，3.を副詞として，すなわち語幹部分の全体が一様ではなくてもともと名詞と副詞との混合であったとして，処理し得るようであるが，しかしながら，2.は，名詞でもなく副詞でもないし，しかも例外的でもなくて却って典型的であり，ここにこそ問題があると言わなければならない。

この問題に対する一解決は，連体修飾語および連用修飾語に関わるそもそもの基準を無効とすることにより，理論的に示されることになる。しかし，教育的な実践上の観点からは，これ以上に問題に深入りはしないことにする。要するに，形容動詞を一語と認めることの根拠は弱く，しかも二語と認めてもその二語を他の品詞に帰属させることができない，というのがここでの結論である。他の品詞に帰属させることができない語幹部分を他の品詞から独立させ，語尾部分を付した「＿＿に」「＿＿な」をその語幹部分の異形と認めることにすれば，この品詞はもとの形容動詞とさして変わるところがないということになる。更に，それと意味を同じくしながら，構文上の機能

だけが異なる「＿＿だ」なども統一的に把握しようとするならば，これはもとの形容動詞そのものである，ということになる。

実践的な教育の観点から考えて，結論すれば，形容動詞は「＿＿に」「＿＿な」を特徴とする用言であるということになり，用言におけるその地位は，上に述べた特色から，

形　容　動　詞 ―― 形 容 詞
　　|　　　　　　　|
「する」複合動詞 ―― 一般動詞

という図式のうちにとらえてよいかと思われる。「する」複合動詞，いわゆるサ行ザ行変格活用複合動詞については，別に述べる機会があるであろう。

付け加えれば，「同じ」は，連体形が「同じ」であって「＿＿な」とはならないが，その他の点においては形容動詞と同じ活用をする。特徴のひとつを失いながらも，形容動詞の特殊なものと考えておいてよいであろう。「こんな」「そんな」「あんな」「どんな」も，ふつうは連体詞に分類するが，準じて考えておいてもよいであろう。もっとも，「同じなものか」また「同じなので」「こんななので」また「同じなのに」「こんななのに」という例外があって，かえって形容動詞そのものの姿を呈している。

### 3.2.　語，語法の理解

**3.2.1.**　映画に現われた語，語法について，いくつか注釈を補っておく。

**形容動詞の化石化**　㉞に連体詞「大きな」「小さな」が現われている。ともに，古くは「大き」「小さ」を語幹とする形容動詞であり，その連体形の化石化したものである。「いろんな」「おかしな」も同様である。3.1.の最後に挙げた「こんな」以下の末尾も，もとは形容動詞語尾と同じものであったかと推測される。そのように連体形が連体詞に化石化したのに対し，連用形が副詞に化石化したと考えられるものもある。「常に」「一斉に」などである。「近々」「段々」などは「＿＿に」の形でなくともそのままでも用いられる。

形容動詞の活用は，現代語ではいわゆるナリ活用のみであるが，古くはタ

リ活用と言われるものがあった。起源上は，ナリ活用は「＿＿に」を基礎としてそれに「あり」を複合して活用し，タリ活用は「＿＿と」を基礎としてそれに「あり」を複合して活用した。ナリ活用の古い連体形「＿＿なる（←＿＿にある）」（→「＿＿な」）に対して，タリの連体形「＿＿たる（←＿＿とある）」である。タリ活用の連用形「＿＿と」および連体形「＿＿たる」は，副詞および連体詞となって現代語に化石化している。

| | |
|---|---|
| 堂々と | 堂々たる |
| 泰然と | 泰然たる |
| さっそうと | |
| 赤々と | |
| | 確たる |

「あたふた」のように，「＿＿と」でも「＿＿」でも副詞であるものもある。なお，「ふと」「ずっと」など，副詞には「＿＿と」の形のものが少なくない。

**形容動詞を形成する接尾辞**　形容動詞を形成する接尾辞は，映画には現われていないが，「がち」「的」がある。「＿＿的」は，連体形「＿＿的な」によるほか，「＿＿的」のみで直接に体言を修飾することが一般的にできる。「＿＿的な」は，語尾「な」が付されているだけ，言わば叙述的であり，「＿＿的」は，3.1.の形容動詞語幹の独立性の第2点のことが実はそうであるように，複合名詞の成分としてその複合名詞のうちに解消し，構文上の機能をもたなくなっている。

責任を徹底的に追及する。

責任の徹底的な追及をする。

責任の徹底的追及をする。

という移行をみればよいのである。なお，「比較的」は副詞でしかあり得ない。

**連体修飾**　第一課以来，連体修飾のし方がいろいろ現われてきているので，ここで整理してみる。

連体詞による。

1. 「この」「その」「あの」

あの建物です。(第一課㉔)

2. その他の連体詞

大きなこいや小さなこい，(本課㉞)

名詞が助詞「の」を伴ったものによる。

3. 名詞が助詞「の」を伴ったもの

あなたの荷物ですか。(第一課⑳)

用言の連体形による。

4. 動詞

(本課までに現われていない。第十四課「なみのおとがきこえてきます」で扱う。)

5. 形容詞

この青い色のベッドはありませんか。(第三課②)

6. 形容動詞

にぎやかな通りですね。(本課②)

用言の連体形には，動詞，形容詞，形容動詞が助動詞を伴ったものがあり得るが，この第六課までにはまだ現われていない。

**陳述の副詞**　⑳に陳述の副詞「余り」がある。副詞を分類すれば，用言の情態を詳しくする「すぐ」「にっこり」などの情態副詞，用言の程度を詳しくする「最も」「ごく」などの程度副詞，述語の限定されたあり方を要求する陳述副詞，の三つとなる。陳述副詞も，

否定の述語を要求する

決してしない。

推測の述語を要求する

きっとするだろう。

要望の述語を要求する

どうぞして下さい。

疑問の述語を要求する

なぜするか。

仮定条件を要求する

もしするならば,

などの種類がある。

**終助詞**　全体によく終助詞が出てきている。その終助詞の性格の一端を理解するため,ここでは,文末の形式が全体的にどうなっているかも見ることとする。どのような文末で話しが進んでいくか,順に挙げる。例えば,「ね⟶よ」は,終助詞「ね」で終わる文を含めて話し掛け,終助詞「よ」で終わる文を含めて相手が答えた,ということを示す。終助詞で終わる文が含まれていなければ「。」,相手の言ったことに反対したのならば「¯」の記号を使う。話し掛けてもなにも答えなかったときには,答えの部分を空欄としておく。

| 男 | | 女 | 女 | 中学生 | 母 | 子 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ね | ⟶ | ね（6対） | | | | |
| ね | ⟵ | ね（1対） | | | | |
| ね | ⟶ | ¯。（1対） | | | | |
| ね | ⟶ | （1対） | | | | |
| | ⟵ | ね（1対） | | | | |
| | | | | | よ ⟶ | （2対） |
| かな | ⟶ | よ（1対） | | | | |
| よ | ⟵ | か（1対） | | | | |
| か | ⟶ | 。（2対） | か ⟶ | 。（1対） | | |
| か | ⟶ | ¯。（1対） | | | | |

疑問が関係していなければ,この映画の男女のやりとりは,終助詞「ね」によって進められていると言ってよい。自分はそう思うし,あなたもそうお思いでしょう,という感じで,同意を求めつつ,また同意を与えつつ,話しをしているわけである。終助詞「よ」は,男女の間では,問いに対する答えに

伴い，ちょっと念押しをしている程度の感じである。母親から子供への終助詞「よ」は，なだめる気持ちの出たものである。

ところで，第三課「やすくないです　たかいです」にも，終助詞「ね」「よ」および「か」が多々現われた。その使用人物は男二人，しかも一意見と反対意見との応酬で話しのほとんどが埋められている。上のような表にすることができないほど，受け答えの一対一対は異なるが，強いて図式化すれば，

$$\left.\begin{matrix}\text{ね}\\ \text{。}\end{matrix}\right\} \longrightarrow \left\{\begin{matrix}\overline{\text{よ}}\\ \underline{\text{。}}\end{matrix}\right.$$

が多いということになるであろうか。一方が同意を求めれば，他方は反対しつつ説得にかかろうとする，というわけである。上で典型的であった「ね⟶ね」は，第三課では

「㊷薄いですね。」

「㊸厚くないですね。」

および

「⑦短いですね。」

「⑧短くないですよ。

……⑨うーん，背が高いですね。

⑩このベッドは短いですね。」

に見られるのみである。後者の⑧と⑨との間の「……」は，相手の言ったことを一応検分しているところであり，⑧「よ」から⑨⑩「ね」への移り行きに注目されたい。

波風を立たせずに仲睦まじく過ごしている男女と，仲はいいのであろうが喧嘩ばかりしている男二人と，その関係の違いが文末の形式によく出ていると言ってよいのである。逆に，文末の形式は，いま顧みなかった「です」「ます」や「う，よう」をも含めて，話し手聞き手の関係を知る手がかりとなり得るものである。そのような文末の形式として，終助詞「ね」「よ」の現われ方は，注目すべきものの一つであろう。

**＿＿じゃ**　⑳に，形容動詞連用形「＿＿で」と副助詞「は」との融合した

「＿＿じゃ」がある。副助詞「は」は，その前に立つ語の末尾の音とよく融合する。

格助詞「に」「は」　⟶「にゃ(あ)」
　　「で」「は」　⟶「じゃ(あ)」
　　「より」「は」　⟶「よりゃ(あ)」
副助詞「ばかり」「は」⟶「ばかりゃ(あ)」
　　「だけ」「は」　⟶「だきゃ(あ)」
助動詞「(さ)せ」「は」⟶「(さ)しゃ(あ)」
　　「(ら)れ」「は」⟶「(ら)りゃ(あ)」
　　「たく」「は」　⟶「たか(あ)」
　　「らしく」「は」⟶「らしか(あ)」
　　「ように」「は」⟶「ようにゃ(あ)」
　　「ようで」「は」⟶「ようじゃ(あ)」
　　「そうに」「は」⟶「そうにゃ(あ)」
　　「そうで」「は」⟶「そうじゃ(あ)」
　　「で」「は」　⟶「じゃ(あ)」
　　「なく」「は」　⟶「なか(あ)」
　　「ず」「は」　⟶「ざ(あ)」
代名詞「これ」「は」　⟶「こりゃ(あ)」
　　「わたし」「は」⟶「わたしゃ(あ)」
　　ほか
形容詞「なく」「は」　⟶「なか(あ)」
　　ほか
動　詞「行き」「は」　⟶「行きゃ(あ)」
　　「落ち」「は」　⟶「落ちゃ(あ)」または「落ちや」
　　「見」「は」　⟶「見や」
　　「し」「は」　⟶「しや」
　　「来」「は」　⟶「来や」

ほか

**外来語**　第一課以来現われてきた外来語をここに整理しておく。日本語の語彙を由来によって類別するときには，和語，漢語，外来語の三つとするのが通常である。ただし，漢語も，中国語に由来する，あるいはそれに準ずるという点では，外来語であり，要するに特立するだけの地位を日本語において占めているということである。次に，漢語は除外することとして，第一課以来の外来語を一覧する。由来する言語によって分けて挙げる。

ポルトガル語

タバコ（第一課⑤他）　パン（第三課㊳，第五課⑦他）

オランダ語

コーヒー（第五課㊳）　ゴム（第一課⑰）

英語

ウイスキー（第一課⑧）　エレベーター（第二課㉑）　オレンジ・ジュース（第六課㊵）　カン（第六課㊺）　カンガルー（第四課㊲他）　ジュース（第四課㉛，第六課㊳）　タクシー（第二課⑦他）　テレビ（第五課㉗）　ノート（第六課㉖他）　バス（第五課⑬他）　パンダ（第四課㉑他）　プラスチック（第一課⑰）　ベッド（第三課②他）　ポケット（第二課㊹）　ポスト（第二課③他）　ホテル（第一課㉕他）　ミルク（第五課⑧他）　ライオン（第四課㉔他）　ラジオ（第二課㊷他）　ワラビー（第四課㊴）

日本語における外来語では，漢語に次いで英語に由来するものが大きい地位を占め，第一課以来の外来語の現われ方にもそれをうかがい得る。外来語の占める地位は，日本文化に対してその言語の文化が与えている影響に，ほぼ比例していると言い得るであろう。第四課の「パンダ」「ライオン」「カンガルー」「ワラビー」といったたぐいは世界の事柄について日本語がどこから知識を取り入れているか，示唆するところがあるであろう。また，「タバコ」のように日本語とも感じられるもの，「カン」のように由来を考えるのに迷うものなどもあるが，外来語は，その由来する言語から日本語をみるときに

は，日本語を理解するのに役立つものである。例えば，「ラジオ」はローマ字綴りを同じくして原語英語と音が異なることを示し，「ウイスキー」「エレベーター」は日本語におけるワ行イ段音および重母音の弱さを示し，「テレビ」は日本語の語の長さについて示唆を与える，というわけである。「ベッド」の有声音の前の促音は和語，漢語にはないものである。ついでながら，第八課「どちらがすきですか」に画家「ゴッホ」があり，このハ行音の前の促音も和語，漢語にはないものである。日本語における外来語としての意味と原語のそれとの間には，なんらかの違いがあるのが常であるが，そのことについては立ち入らないこととする。

**もっと，もう** ㊶「もっと」と㊷「もう」との関係は，次のごとくである。なお，「日本語教育映画解説4」（P．17）も参照されたい。

もっと続けましょう。

{ええ，もっと続けましょう。
{いいえ，もうやめましょう。

もうやめましょう。

{ええ，もうやめましょう。
{いいえ，もっと続けましょう。

「もっと」を「もうひとつ」とか「もう少し」とかに代えることができるので，

もっと
もうひとつ　←→もう
もう少し

という対立の図式を描くことができる。「もっと」の系列には肯定的な意味合いが，「もう」には否定的な意味合いが，それぞれ伴っている。このような対立のために，答えは，「もっと」「もう」のみにまで圧縮することもできるのである。特に，問い掛けを否定するときに，よく起こる。

もっと続けよう。

（いや，）もう。

もうやめよう。

（いや，）もっと。

のようである。

**お願いします**　㊵に「オレンジジュースをお願いします」がある。いま一般的にどうせよと意味するものは除き，それを自分のために与えよと意味する「___をお願いします」を考える。前に問い掛けがある場合，その問いの形は「どれを」「どれに」「どれが」のいずれでも可能であり，逆に，そのような問いの形に対し，答えとしては「___にお願いします」も可能である。例えば，買い物の場面があるとして，

どれを差し上げましょうか。

{これをお願いします。
{これにお願いします。

どれに致しましょうか。

{これをお願いします。
{これにお願いします。

どれが宜しいでしょうか。

{これをお願いします。
{これにお願いします。

のような応答が可能である。問いの形すなわち「どれ」に伴う格助詞のいかんにかかわらず，答えとしての「___に」は，それに決めたのでそれを与えよと，言わば決意をしたというニュアンスを含んで，意味し，それに対して，答えとしての「___を」は，言わばニュートラルに，単にそれを与えよと意味するのである。

**3.2.2.**　国立国語研究所日本語教育センター第一研究室の特別研究「日本語教育のための基本的な語彙に関する調査研究」で示された語の一般性，基本性によって，その上位6000位までにはいる語から，形容動詞を抜き出し，国立国語研究所（林大）『国立国語研究所資料集6　分類語彙表』の分類に従って次に掲げる。語幹のみを示す。分類項目二つにわたるものもある。

3.100　いかが　別々　主（※も）　重要　別　純粋

3.101　正当　正常　正式　本格的　当然　当たり前　もっとも

3.110　無関係　有効　無効　だめ　合理的　無理

3.111　ばらばら

3.112　同様　対等　共通　反対　逆　あべこべ

3.113　無茶

3.114　そっくり

3.120　まれ

3.121　必要　不必要　偶然　緊急

3.123　可能　不可能　容易　便利　無理　困難

3.130　微妙　簡単　単純　複雑　面倒　手軽　単調　種々　いろいろ
　　様々

3.131　普通　平凡　非常

3.132　特別　特殊　独特　変　妙　奇妙　深刻　重大

3.133　良好　不良　結構　妥当　適宜　適当　適切

3.134　安全　無事　無難　大丈夫　危険　好調　順調　神秘　だめ
　　見事　立派　優秀　すてき　結構　上等　粗末　貧弱

3.14　強力　有力　貧弱　強烈　猛烈

3.15　自由　不自由　積極的　消極的　活発　盛ん　円滑　ふらふら

3.165　あいにく

3.1661　新た　新鮮

3.180　具体的　抽象的

3.182　四角　平ら　滑らか　でこぼこ　まっすぐ　水平　垂直　平行

3.183　しなやか

3.1920　はるか　窮屈

3.1921　かすか　細か

3.193　軽快

3.194　にわか　急　急激

3.195　沢山　無数　わずか　豊か　豊富

3.198　孤独

3.1990　無限　完全　不完全　充分　不充分　大抵

3.1992　余計

3.1993　随分　かなり　相当　大層　大変　非常　余り　余(あんま)り

3.300　敏感　鈍感　夢中　得意　朗らか

3.3010　楽　気楽　のんき　窮屈　愉快　不愉快

3.3011　惨め

3.3012　残念

3.302　好き　大好き　嫌い　大嫌い　嫌(いや)　かわいそう　気の毒

3.304　利口　賢明　幼稚　ばか　無知　非常識

3.305　有能　無能　上手　下手　器用　不器用　得意　巧み　巧妙

3.306　詳細　大ざっぱ　確か　確実　正確　不正確　明確　あいまい　明らか　不明　不思議　意外　案外

3.307　無意味　抽象的　具体的　主観的　客観的　論理的　合理的

3.31　無口　早口　ぺらぺら　大げさ　露骨　秘密

3.330　歴史的　モダン　有名　上品　下品　豪華　華やか　はで　じみ　粋　スマート　素朴

3.331　幸い　幸せ　不幸せ　幸運　幸福　不幸　無事

3.332　多忙

3.333　衛生的

3.335　不吉　厳か

3.339　しとやか　乱暴

3.340　有望

3.341　偉大　欲深　けち　無茶

3.342　無邪気　純情　素朴　素直　正直　まじめ　慎重　軽率　誠実

3.343　がんこ　率直　気軽　生意気　陽気

3.344　強気　積極的　消極的　強引　勇敢　ひきょう　平気　冷静　大胆　おくびょう　短気

3.345　明朗　穏やか　素直　男性的　女性的

3.346　わがまま　勝手　自由　でたらめ　浮気

3.347　本気　真剣　熱心　夢中　一生懸命　いい加減

3.348　おろそか　忠実　勤勉

3.35　和やか

3.360　公平　不公平　平等　厳重　自由

3.368　ていねい　無礼　失礼　親切　不親切　冷酷　残酷　意地悪

3.37　大切　大事　肝心　重要　必要　貴重　有利　不利　有益　便利　不便　むだ　貧乏　ぜいたく　質素　にぎやか

3.501　真暗　明らか　めいりょう　明白　鮮やか　かすか　透明

3.502　真白　真黒　真赤　真青　きれい

3.503　静か　ひそか

3.506　清らか　清潔　不潔　柔らか　がんじょう

3.515　暖か　穏やか　のどか　さわやか

3.55　有害　無害　有毒　男性的　女性的

3.584　健康　健全　丈夫　新鮮

ちなみに，

3.100　こんな　そんな　あんな　どんな

3.112　同じ

である。

「日本語教育映画解説3」に掲げた形容詞（pp. 23—25）は，ここの形容詞とは掲げた基準が異なり，単純に比較することはできないが，大体の傾向として，形容動詞と形容詞とは意味領域について言わば補い合うように分布している，と言ってよいのではないかと思われる。

## 3.3. 練習問題

どのようなことを練習したらよいかを，問題例を通して掲げる。

形容動詞の活用を与えることを主目的とする。

A．口ならし

シ¬ズカ　　シ¬ズカナ

シ¬ズカデス　　シ¬ズカニ

シ¬ズカジャア「リマセ¬ン

左列上中下から右列上中へを繰り返す。形容動詞のアクセントは，形容詞・動詞と異なり，名詞と同じく，一語一語で一定している。そのことは，この課に現われない「＿＿だ」「＿＿で」「＿＿なら」を通しても言い得るのである。語幹末尾によっても，「＿＿的」は平板型である。和語「＿＿か」は，原則として，語幹末尾から3番目の音節の後に滝がある。その例外は，3.2.2.に掲げた形容動詞の範囲内で言えば，「ひそか」「細か」「暖か」「柔らか」であり，「ひそか」は古形のまま，他は恐らく形容詞の影響を受けて，語幹末尾から2番目の音節の後に滝がある。ただし，「細か」「暖か」は原則どおりのアクセントも示す。

以下の練習については，アクセントを示さない。

B．肯定と否定，反義語

肯定「＿＿です」と否定「＿＿じゃありません」とを，応答で扱う。

好きですか。

いいえ，好きじゃありません。

嫌いです。

終助詞「ね」を入れた形。

好きですね。

いいえ，好きじゃありません。

嫌いです。

いずれにせよ，「いいえ」のみに終わらせず，否定「＿＿じゃありません」で答えさせ，また反義語による肯定「＿＿です」で答えさせる。もっとも，和語あるいはそれに準ずるものでの反義語関係は少ない。3.2.2.範囲では，「好き」「嫌い」のほか，

真白　　真黒
平ら　　でこぼこ
上手　　下手
派出　　じみ

程度であろうか。2.2.2.の場面Ⅱで「静か」「にぎやか」を反義語として扱ったが，実はややこじつけである。

静か　　うるさい
にぎやか　ひっそりして（いる）

がむしろよく，「静か」「うるさい」の類

滑らか　　粗い
きれい　　汚い

は，形容詞の復習を兼ねて与えてもよい。「にぎやか」「ひっそりして（いる）」の類は，第十一課「きようはあめがふっています」以降の課題となる。

漢語を与えることは，まだ早いと思われるが，参考のために類型のみを挙げておく。

具体的　　抽象的
積極的　　消極的
主観的　　客観的
敏感　　鈍感
上品　　下品
有効　　無効
有利　　不利
自由　　不自由
幸福　　不幸

「不」による和語の反義関係「幸せ」「不幸せ」もある。

否定の形に，「じゃ」に代えて「では」を用いた

好きですか。

いいえ，好きではありません。

嫌いです。

も，第一課「これはかえるです」の名詞の否定の言い方の復習を兼ねて，出しておいてよい。ついでに，名詞の否定の言い方に「＿＿じゃありません」を導入しておくこともできる。否定の別形を用いた

好きですか。

いいえ，好きじゃないです。

嫌いです。

は，形容動詞の最も基本的な特徴をつかむというこの課の目的に照らして，控えたい。

C．連体修飾

形容動詞の特徴的な活用「＿＿に」「＿＿な」をつかませるが，「＿＿に」は助詞あるいは副詞形成接辞と紛れることが後々起こるので，この段階ではとにかく「＿＿な」をつかませてしまう。連体修飾一般を「＿＿な」で行うことができるのは，形容動詞に限られるのである。

言い換えの形による練習。

あれは美術館です。立派です。

あれは立派な美術館です。

あの美術館は立派です。

第1行を与えて第2行を答えさせる。第3行は，「＿＿です」との関係を理解させるものとして，加えて答えさせてよい。

ついでを以って，連体修飾一般につき，3.2.1.を参照しながら，練習する。

1. 「この」「その」「あの」「どの」（特立しない）

2. 連体詞

あれは大きな美術館です。

連体詞については，

あれは美術館です。____です。

あの美術館は____です。

の____を埋めることができないことに注意。なお，形容動詞連体形「____な」の語尾に引きずられて，連体詞「大きな」「小さな」から「大きに」「大きです」などを引き出さないよう，留意させる必要がある。

3. 名詞及び格助詞「の」

あれは建物です。美術館です。

あれは美術館の建物です。

あの建物は美術館です。

第一課以来の表現であり，復習ということで上記の形容詞にならう。第2行の肝心の「の」が，所有「がもっている」か同格「である」か，あいまいであり，むしろ同格と解するのが自然であろうが，いまそこに立ち入らないこととする。

4. 形容動詞連体形

（上記）

5. 形容詞連体形

あれは美術館です。大きいです。

あれは大きい美術館です。

あの美術館は大きいです。

形容詞の連体形についての練習は，既に第三課「やすくないです　たかいです」で済んでいるはずであり，ここでは復習ということで形容動詞にならうこととする。

6. 動詞連体形

（練習しない）

D. 連用修飾，語順

連用形「____に」を練習させる。動詞を被修飾語とするもの。

ブランコをこぎます。上手です。

上手にブランコをこぎます。

ブランコを上手にこぎます。

第1行を与えて，第2行および第3行を答えさせる。映画では「⑫元気に遊びます」「㉔きれいに咲きました」の自動詞を修飾するものだけであったが，要するに，一つの被修飾語に対しては，修飾語の順序は基本的に自由である。ただし，また，⑫の全文，

ええ，子供はみんな元気に遊びます。

の5文節の順序は，どう崩しても余り自然でない。すなわち，修飾語の順序はある制約のもとに自由であり，そのことを踏まえた上で例文を出してみた。しかし，連用形「＿＿に」をつかませるだけならば，名詞と格助詞との「＿＿に」を取らない自動詞を，被修飾語としてもってくるのがよい。

E．形容動詞の活用

この映画に現われた形容動詞の活用を，A.に戻ってまとめることとする。

| | |
|---|---|
| 静か | 静かな |
| 静かです | 静かに |
| 静かじゃありません | |

いずれか一つを挙げて，他を答えさせるような形でよい。ただし，右列は，

静かなこと

静かにする

のように，被修飾語を加えておいた方が実用のためによいかも知れない。また。「こと」「する」に代えて，適宜名詞または動詞を与えるがよい。

上手な話し

上手に話す

などである。

「＿＿は好きですか」について練習しておく。この構文については，第八課「どちらがすきですか」で特に詳しく扱う。

F．例文

花は好きですか。

ええ，花は好きです。

魚は好きですか。

いいえ，魚は好きじゃありません。

応答による練習に留め，肯定否定疑問だけを扱うことにする。「好き」に代えて「嫌い」を，「花」「魚」に代えて適当な名詞を，それぞれ練習する。注意すべきことは，名詞が「好き」「嫌い」の対象の事物を指していることである。すなわち，「好き」「嫌い」の主体を指す，

あなたは（花が）好きですか。

はい，わたしは（花が）好きです。

の「あなた」「わたし」のようなものは避けなければならない。

陳述の副詞について練習しておく。

G．例文

あの美術館は立派ですか。

いいえ，あの美術館は余り立派じゃありません。

陳述の副詞については，述語に否定を要求するもののみに，留めることとする。応答練習で，否定を答えさせるのみでよい。

「____をお願いします」について。

H．例文

店で物を買うとして，店員の問いと客の自分の答えとにしてみる。問いの形で分けて，先ず「どれを」。

どれを差し上げましょうか。

これをお願いします。

次ぎに「どれに」。

どれに致しましょうか。

これをお願いします。

最後に「どれが」。

どれが宜しいでしょうか。

これをお願いします。

以下，「どれ」を「なに」に，「これ」を「あれ」「それ」や適当な名詞句に，それぞれ変えていく。いずれも，答えを言わせればよい。「どれに」に対する

これにして下さい。

あるいは「どれが」に対する

これがいいです。

は，一往控えておくことにする。後者は第三課『やすくないです　たかいです』の形容詞の復習として後に出してもよい。

「もっと」「もう」「結構」

I．例文

{もっと飲みますか。
{もう結構です。

{もう飲みませんか。
{もっと飲みます。

## 4. 形容詞文献抄

雑誌論文からは採らなかった。一著者が一冊を費して日本語文法の全貌を論じたものも挙げなかった。それらについては，下記各書の参考文献の項を参照されたい。


飯豊毅一　1973「形容詞・形容動詞の語幹・各活用形の用法」(鈴木-林　1973　pp. 163—206)

大久保忠利-奥津敬一郎　1975『新・日本文法講座 2　日本文法の見えてくる本』汐文社

大野　晋-柴田　武　1976『岩波講座日本語 6　文法 I』岩波書店

柏谷嘉弘　1973「『形容動詞』の成立と展開」(鈴木-林　1973　pp. 95—162)

春日和男　1964「『形容動詞』」(時枝-遠藤　1964　pp. 151—167)

鈴木一彦　1973「近代文法書および辞書の形容動詞一覧」(鈴木-林　1973　pp. 232—270)

鈴木一彦-林　巨樹　1973『品詞別日本文法講座 4　形容詞・形容動詞』明治書院

時枝誠記-遠藤嘉基　1964『講座現代語 6　口語文法の問題点』明治書院

西田直敏　1967「『形容動詞』について」(松村-森岡-宮地-鈴木　1967　pp. 108—131)

橋本四郎　1957「品詞論の諸問題——体言と用言——」(明治書院　1957　pp. 51—76)

林　大　1964『国立国語研究所資料集 6　分類語彙表』秀英出版

林和比古　1959「形容動詞」(明治書院　1959　pp. 227—252)

松下　厚　1975「『自由の女神』と『自由な女神』——名詞と形容動詞——」(大久保-奥津　1975　pp. 97—109)

松村　明-森岡健二-宮地　裕-鈴木一彦　1967『講座日本語の文法 3　品詞各論』明治書院

明治書院　1957 『日本文法講座 1　総論』 明治書院
_____　1959 『続日本文法講座 1　文法各論編』 明治書院
山口佳紀　1976 「体言」(大野-柴田　1976　pp. 129—168)

# 資　料

## 資料1.　使用語彙一覧

これは映画中に使用された全ての語を一覧表にしたものである。資料2.のシナリオ全文のせりふ同様，教材として活用できることも考慮してかな（ひらがな，かたかな）書きにしてある。

1.　見出し語はアイウエオ順に配列し，そこにその使用文例を全て書き出した。

2.　見出し語の認定については，初教日本語教育の立場に立っている。

2—1.　形容動詞の見出し語は，使用文例がなくても，「＿＿な」の形とした。

2—2.　動詞は「ます」を取り除いた形を見出し語にし，その横に終止形を示した。

2—3.　「です」に対する「じゃありません」を見出し語にしている。

2—4.　「ます」「ました」をそれぞれ見出し語にしている。

2—5.　「おねがいします」等慣用的表現として扱ったものは，そのまま見出し語にしている。

3.　見出し語の語義，活用変化，他の語との結びつき等に基づいて下位分類する場合には，(1)(2)……のようにした。

3—1.　形容動詞は活用等により，つまり「＿＿な」「＿＿に」「＿＿です」等で下位分類してある。

3—2.　「です」及び「ます」は終助詞との結びつき方で下位分類してある。

4.　使用文例の文頭には，①②……の数字がつけてある。これはシナリオに現われた文の通し番号で，この解説書全体に共通のものである。同一見出し語内ではこの順に文例を提出した。(1)(2)……と下位分類した場合にも，その分類内で同一の提出順をとっている。全くの同一文の場合には，⑩㉜のように数字を横に並べ，引用を一回ですませた。ただし，同一文でも文中において語の用いられる位置が異なれば引用を繰り返し

た。

5. 見出し語の横には〔　〕で当用漢字の範囲内で漢字を示し，またその横には（　）で語の使用回数を示した。

6. 文例の使用環境を知りたい場合には資料2. のシナリオ全文を参照のこと。

**あかい**〔赤い〕（1）

㊱　きれいな**あかい**こいですね。

**あそび，あそぶ**〔遊ぶ〕（1）

⑫　ええ，こどもはみんなげんきに**あそび**ますね。

**あっ**（1）

⑦　**あっ**，あぶない。

**あの**（3）

⑤　**あの**りっぱなたてものはなんですか。

⑮　ほら，**あの**こ。

㉑　**あの**こはまだへたですね。

**あの**……（1）

㉘　**あの**……。

**あぶない**〔危ない〕（1）

⑦　あっ，**あぶない**。

**あまり**（1）〔余り〕

⑳　いいえ，**あまり**じょうずじゃありません。

**あらっ**（1）

㉕　**あらっ**，わすれもの。

**ありがとう**（2）

⑩㉜　どうも**ありがとう**。

**あれ**（1）

㉟　**あれ**はきれいですね。

**い，いる**（2）

㉝　いろいろなこいが**い**ますね。

㉞　ええ，おおきなこいやちいさなこい，たくさん**い**ますね。

**いいえ**（1）

⑳　**いいえ**，あまりじょうずじゃありません。

**いかが**（2）

㊳　ジュースは**いかが**ですか。

㊶　もっと**いかが**ですか。

**いろいろな**（1）

㉝　**いろいろな**こいがいますね。

**うん**（1）

⑨　**うん**，だいじょうぶ。

**ええ**（7）

②　**ええ**，にぎやかなとおりですね。

④　**ええ**，しずかなこうえんですね。

⑫　**ええ**，こどもはみんなげんきにあそびますね。

⑭　**ええ**，すきです。

㉓　**ええ**，きれいなはなですね。

㉞　**ええ**，おおきなこいやちいさなこい，たくさんいますね。。

㊴　**ええ**。

**おおきな**〔大きな〕（1）

㉞　ええ，**おおきな**こいやちいさなこい，たくさんいますね。

**おねがいします**〔お願いします〕（1）

㊵　じゃあ，オレンジ・ジュースを**おねがいします**。

**オレンジ**（1）

㊵　じゃあ，**オレンジ**・ジュースをおねがいします。

**か**（5）

⑤　あのりっぱなたてものはなんです**か**。

⑬　こどもはすきです**か**。

㉙　これです**か**。

㊳　ジュースはいかがです**か**。

㊶　もっといかがです**か**。

**が**（1）

㉝　いろいろなこい**が**いますね。

**かな**（1）

⑯　だいじょうぶ**かな**。

**かん**（1）

㊺　**かん**はここよ。

**きれいな**（5）

(1)㉓　ええ，**きれいな**はなですね。

㊱　**きれいな**あかいこいですね。

(2)㉔　**きれいに**さきましたね。

(3)㉒　**きれい**ですね。

㉟　あれは**きれい**ですね。

**けっこうな**〔結構な〕（1）

㊷　もう**けっこう**です。

**げんきな**〔元気な〕（2）

(1)⑫　ええ，こどもはみんな**げんきに**あそびますね。

(2)⑪　こどもは**げんき**ですね。

**こ**〔子〕（2）

⑮　ほらあの**こ**。

㉑　あの**こ**はまだへたですね。

**こい**（5）

㉝　いろいろな**こい**がいますね。

㉞　ええ，おおきな**こい**やちいさなこい，たくさんいますね。

㉞　ええ，おおきなこいやちいさな**こい**，たくさんいますね。

㊱　きれいなあかい**こい**ですね。

㊲　こちらのはりっぱな**こい**ですね。

**こうえん**〔公園〕（1）

④　ええ，しずかな**こうえん**ですね。

**ここ**（2）

③　**ここ**はしずかですね。

㊺　カンは**ここ**よ。

**ごちそうさま**（1）

㊸　**ごちそうさま**。

**こちら**（1）

㊲　**こちら**のはりっぱなこいですね。

**こども**〔子供〕（3）

⑪　**こども**はげんきですね。

⑫　ええ，**こども**はみんなげんきにあそびますね。

⑬　**こども**はすきですか。

**これ**（1）

㉙　**これ**ですか。

**さき，さく**（1）〔咲く〕

㉔　きれいに**さき**ましたね。

**しずかな**〔静かな〕（2）

(1)④　ええ，**しずかな**こうえんですね。

(2)③　ここは**しずか**ですね。

**じゃあ**（1）

㊵　**じゃあ**，オレンジ・ジュースをおねがいします。

**じゃありません**（1）

⑳　いいえ，あまりじょうず**じゃありません**。

**ジュース**（2）

㊳　**ジュース**はいかがですか。

㊵　じゃあ，オレンジ・**ジュース**をおねがいします。

**じょうずな**〔上手な〕（3）

⑱　**じょうず**ですよ。

⑲　**じょうず**ですね。

⑳　いいえ，あまり**じょうず**じゃありません。

**すきな**〔好きな〕（2）

⑬　こどもは**すき**ですか。

⑭　ええ，**すき**です。

**だいじょうぶな**〔大丈夫な〕（4）

⑧　**だいじょうぶ？**

⑨　うん，**だいじょうぶ**。

⑯　**だいじょうぶ**かな。

⑰　**だいじょうぶ**。

**たいせつな**〔大切な〕（1）

㉛　**たいせつな**ノートです。

**たくさん**（1）

㉞　ええ，おおきなこいやちいさなこい，**たくさん**いますね。

**たてもの**〔建物〕（1）

⑤　あのりっぱな**たてもの**はなんですか。

**だめな**（3）

㊹　**だめ**，だめ，だめですよ。

㊹　だめ，**だめ**，だめですよ。

㊹　だめ，だめ，**だめ**ですよ。

**ちいさな**〔小さな〕（1）

㉞　ええ，おおきなこいや**ちいさな**こい，たくさんいますね。

**です**（25）

(1)⑭　ええ，すき**です**。

⑱　じょうぶ**です**。

㉛　たいせつなノート**です**。

㊷　もうけっこう**です**。

(2)⑤　あのりっぱなたてものはなん**です**か。

⑬　こどもはすき**です**か。

㉙　これ**です**か。

㊳　ジュースはいかが**です**か。

㊶　もっといかが**です**か。

(3)①　にぎやか**です**ね。

②　ええ，にぎやかなとおり**です**ね。

③　ここはしずか**です**ね。

④　ええ，しずかなこうえん**です**ね。

⑪　こどもはげんき**です**ね。

⑲　じょうず**です**ね。

㉑　あのこはまだへた**です**ね。

㉒　きれい**です**ね。

㉓　ええ，きれいなはな**です**ね。

㉖　ノート**です**ね。

㉗　へんなノート**です**ね。

㉟　あれはきれい**です**ね。

㊱　きれいなあかいこい**です**ね。

㊲　こちらのはりっぱなこい**です**ね。

(4)⑥　びじゅつかん**です**よ。

㊹　だめだめ，だめ**です**よ。

**どうも**（2）

⑩㉜　**どうも**ありがとう。

**とおり**〔通り〕（1）

②　ええ，にぎやかな**とおり**ですね。

**なん**〔何〕（1）

⑤　あのりっぱなたてものは**なん**ですか。

**にぎやかな**（2）

(1)②　ええ，**にぎやかな**とおりですね。

(2)①　**にぎやか**ですね。

**ね**（18）

①　にぎやかです**ね**。

② ええ，にぎやかなとおりです**ね**。

③ ここはしずかです**ね**。

④ ええ，しずかなこうえんです**ね**。

⑪ こどもはげんきです**ね**。

⑫ ええ，こどもはみんなげんきにあそびます**ね**。

⑲ じょうずです**ね**。

㉑ あのこはまだへたです**ね**。

㉒ きれいです**ね**。

㉓ ええ，きれいなはなです**ね**。

㉔ きれいにさきました**ね**。

㉖ ノートです**ね**。

㉗ へんなノートです**ね**。

㉝ いろいろなこいがいます**ね**。

㉞ ええ，おおきなこいやちいさなこい，たくさんいます**ね**。

㉟ あれはきれいです**ね**。

㊱ きれいなあかいこいです**ね**。

㊲ こちらのはりっぱなこいです**ね**。

**の**（1）

㊲ こちら**の**はりっぱなこいですね。

**ノート**（3）

㉖ **ノート**ですね。

㉗ へんな**ノート**ですね。

㉛ たいせつな**ノート**です。

**は**（10）

③ ここ**は**はしずかですね。

⑤ あのりっぱなたてもの**は**なんですか。

⑪ こども**は**げんきですね。

⑫ ええ，こども**は**みんなげんきにあそびますね。

⑬　こども**は**すきですか。

㉑　あのこ**は**まだへたですね。

㉟　あれ**は**きれいですね。

㊲　こちらの**は**りっぱなこいですね。

㊳　ジュース**は**いかがですか。

㊺　カン**は**ここよ。

**はい**（1）

㉚　**はい**。

**はな**〔花〕（1）

㉓　ええ，きれいな**はな**ですね。

**びじゅつかん**〔美術館〕（1）

⑥　**びじゅつかん**ですよ。

**へたな**〔下手な〕（1）

㉑　あのこはまだ**へた**ですね。

**へんな**〔変な〕（1）

㉗　**へんな**ノートですね。

**ほら**（1）

⑮　**ほら**，あのこ。

**ました**（1）

㉔　きれいにさき**ました**ね。

**ます**（4）

(1)㊵　じゃあ，オレンジ・ジュースをおねがいし**ます**。

(2)⑫　ええ，こどもはみんなげんきにあそび**ます**ね。

㉝　いろいろなこいがい**ます**ね。

㉞　ええ，おおきなこいやちいさなこい，たくさんい**ますね**。

**まだ**（1）

㉑　あのこは**まだ**へたですね。

**みんな**（1）

⑫　ええ，こどもは**みんな**げんきにあそびますね。

**もう**（1）

㊷　**もう**けっこうです。

**もっと**（1）

㊶　**もっと**いかがですか。

**や**（1）

㉞　ええ，おおきなこい**や**ちいさなこい，たくさんいますね。

**よ**（4）

⑥　びじゅつかんです**よ**。

⑱　じょうずです**よ**。

㊹　だめ，だめ，だめです**よ**。

㊺　カンはここ**よ**。

**りっぱな**〔立派な〕（2）

⑤　あの**りっぱな**たてものはなんですか。

㊲　こちらのは**りっぱな**こいですね。

**わすれもの**〔忘れ物〕（1）

㉕　あらっ，**わすれもの**。

**を**（1）

㊵　じゃあ，オレンジジュース**を**おねがいします。

## 資料2.　シナリオ全文

題　　名　日本語教育映画
　　「しずかなこうえんで」——形容動詞——
企　　画　国立国語研究所
制　　作　日本シネセル株式会社
フィルム　16m／mEKカラー・スタンダード
巻　　数　全1巻
上映時間　5分
現 像 所　東映化学
録　　音　アオイスタジオ
完　　成　昭和51年3月31日
制作スタッフ
　制　　作　静永純一
　制作担当　神崎晴之
　脚　　本　前田直明
　演　　出　前田直明
　演出助手　辛島徹夫
　撮　　影　相良国康
　撮影助手　市川　哲
　照　　明　伴野　功
　音　　楽　吉田征雄
　録　　音　堀内戦治（アオイST）
　ネガ編集　亀井　正
配　　役　男　沢登　護
　　女　石垣葉子
　　自転車の子供　清水達也
　　ノートの中学生　鳥海勝美

| カット | 画　　面 | セ　リ　フ |
|---|---|---|
| 1 | メインタイトル<br>日本語教育映画 | |
| 2 | テーマタイトル<br>しずかなこうえんで<br>——形容動詞—— | |
| 3 | 商店街<br>人通りが多い，にぎやかな通り | |
| 4 | 男と女が話しながら来る | 男「①にぎやかですね。」<br>女「②ええ，にぎやかなとおりですね。」 |
| 5 | 公園<br>歩いて来る二人 | |
| 6 | 静かな公園の風景<br>池，歩道 | 男「③ここはしずかですね。」<br>女「④ええ，しずかなこうえんですね。」 |
| 7 | 緑の林 | |
| 8 | 美術館，外景 | 女「⑤あのりっぱなたてものはなんですか。」<br>男「⑥びじゅつかんですよ。」 |
| 9 | 自転車に乗った子供が，4，5人現れる<br>1人がたおれる | <br>女「⑦あっ，あぶない。」 |
| 10 | 2人，子供を助け，ほこりをはらってやりながら | 男「⑧だいじょうぶ？」<br>子供「⑨うん，だいじょうぶ。⑩どうもありがとう。」 |
| 11 | 子供の遊び場<br>ブランコやすべり台等がある | |
| 12 | すもうをとる子供たち | 男「⑪こどもはげんきですね。」<br>女「⑫ええ，こどもはみんなげんきにあそびますね。」 |

| | | |
|---|---|---|
| 13 | 2人 | 男「⑬こどもはすきですか。」<br>女「⑭ええ，すきです。<br>⑮ほら，あのこ。」 |
| 14 | よちよち歩きの子供が歩いている | 男「⑯だいじょうぶかな。」<br>女「⑰だいじょうぶ。<br>⑱じょうずですよ。」 |
| 15 | 2人，ブランコの所へ行く<br>女，ブランコに乗って，こぐ<br>女，ブランコを止めて | 男「⑲じょうずですね。」<br>女「⑳いいえ，あまりじょうずじゃありません。」 |
| 16 | ブランコの子供 | 男「㉑あのこはまだへたですね。」 |
| 17 | 花の前 | 男「㉒きれいですね。」 |
| 18 | 花の下を歩く2人 | 女「㉓ええ，きれいなはなですね。<br>㉔きれいにさきましたね。」 |
| 19 | ベンチの前で<br>歩いてくる2人 | 女「㉕あらっ，わすれもの。」 |
| 20 | ノート | 男「㉖ノートですね。」<br>女「㉗へんなノートですね。」 |
| 21 | 中学生が現れて | 中学生「㉘あの……。」<br>女「㉙これですか。」<br>中学生「㉚はい。<br>㉛たいせつなノートです。<br>㉜どうもありがとう。」 |
| 22 | こいをみながら<br>たくさんのこい | 男「㉝いろいろなこいがいますね。」<br>女「㉞おおきなこいやちいさなこい，たくさんいます |

| | | |
|---|---|---|
| | | ね。」 |
| 23 | 赤いこい | 女「㉟あれはきれいですね。」<br>男「㊱きれいなあかいこいですね。」 |
| 24 | にしきごい | 女「㊲こちらのはりっぱなこいですね。」 |
| 25 | 2人，こいをみながら立ち去る | |
| 26 | 休憩用ベンチで<br>売店の奥のベンチに座って | |
| | | 男「㊳ジュースはいかがですか。」<br>女「㊴ええ。<br>㊵じゃあ，オレンジ・ジュースをおねがいします。」 |
| 27 | 男，ジュースを買いに売店の方へ行く | |
| 28 | 2人,楽しげにジュースを飲む | |
| | | 男「㊶もっといかがですか。」<br>女「㊷もうけっこうです。<br>㊸ごちそうさま。」 |
| 29 | 2人，ふり返る | 母「㊹だめ，だめ，だめですよ。」 |
| 30 | 母親と子供，ゴミ箱にカンを捨てる | 母「㊺カンはここよ。」 |
| 31 | 2人，顔を見合わせる | |
| 32 | 企画・制作タイトル<br>企画　国立国語研究所<br>制作　日本シネセル株式会社 | |

昭和54年3月

国立国語研究所

〒115　東京都北区西が丘3－9－14
電話東京（900）3111(代表)

印刷所　神谷印刷株式会社
電話（912）2571